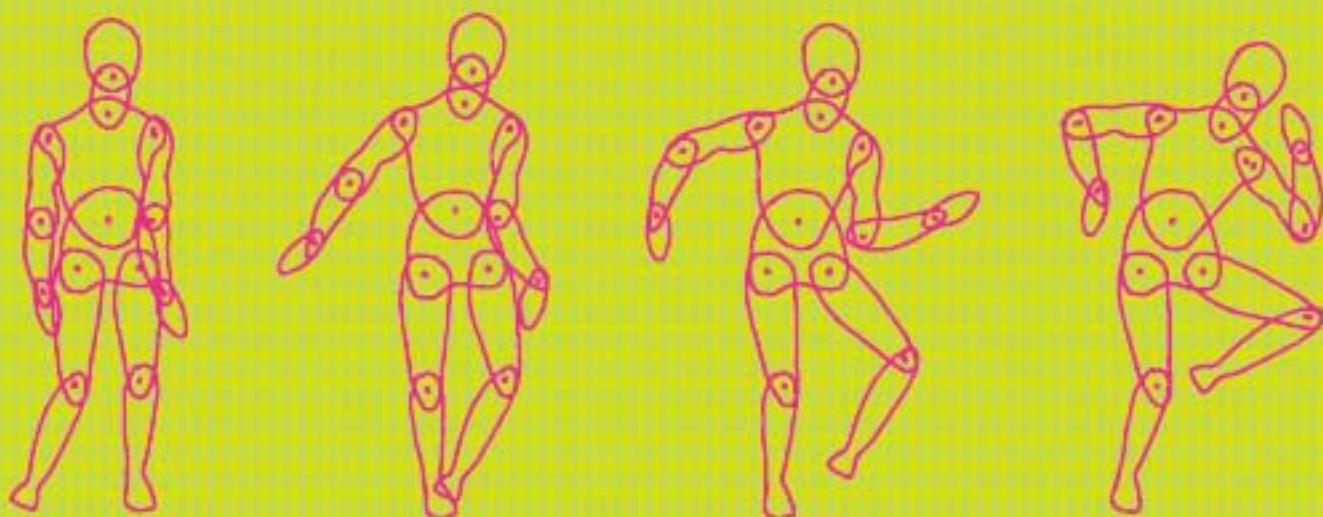


慶應義塾大学出版部発行 慶應義塾大学出版部発行 慶應義塾大学出版部発行 慶應義塾大学出版部発行 慶應義塾大学出版部発行

慶應義塾未来先導基金による2007年度文学実験授業の成果と可能性

身体知と新しい文学教育

Embodied Knowledge and New Literary Education



身体知と新しい文学教育

慶應義塾未来先導基金による
2007年度文学実験授業の成果と可能性

CONTENTS

はじめに (要旨) でっかい頭にしなやかに動く体——語力・創造力・行動力のために	2
1 教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」の開始	4
2 未来先導基金採択事業「声を考えるプロジェクト (略称：声プロジェクト)」——「新しい文学教育」の試み.....	5
3 新しい文学教育	6
4 結び	26
参考資料.....	29
授業アンケート 授業内配布物 (①～③) 創作文集	

身体知と新しい文学教育

慶應義塾未来先導基金による 2007 年度文学実験授業の成果と可能性



武藤浩史
横山千晶

はじめに (要旨)

でっかい頭にしなやかに動く体——語力・創造力・行動力のために

頭でっかちという言葉には、いささか不快な反知性主義の匂いがするが、もちろん言いたいことは分かる。世間には評論家気取りで行動の伴わない頭でっかちがたくさんいて、企業においても学校においても非生産的なごたくを並べつづけている。しかし、頭がでっかいこと自体が悪いわけではない。でっかい頭を支えることのできる強くしなやかな体があるならば、そして、その頭と体がきちんと連携し合って、知・情・意のバランスの取れた、創造力と行動力の双方に秀でた統合的知性が育まれるのであれば、知識はたくさんあった方がいいし、批評力も役に立つ。

だが、「頭」と連携させる形で、しなやかに動く「体」をどのように育成すればいいのか。それを大学でどのように教えればいいのか。言うは易くして、行うは難い。しかし、教養研究センターの考え目指す「教養」とはその種の統合的知性のことであり、同センターの考え目指す「身体知」教育はその試みの核心を成すものである。教養研究センターから発信される「身体知」教育モデルが慶應義塾を先導し、慶應義塾から発信される教育モデルが日本を先導するのでなければ、当センターの存在意義に疑問が投げられたとしても仕方がない。「生命」をテーマに慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスで行われ大きな成功を取めた教養研究センター「鶴岡」セミナーとともに、2007 年度と 2008 年度と続けて塾創立 150 年未来先導基金事業に採択された「声を考えるプロジェクト (略称：声プロジェクト)」(他に英語演劇教育、音楽実践教育がある)の一環として行われた文学実験授業「新しい文学教育」(2007 年 8 月 6 日～8 月 11 日および 2008 年 8 月 7 日～8 月 13 日実施)は、創造力と行動力に秀でた統合的知性の育成を目指す「身体知」教育の具体的試みの一つで、参加者から熱狂的な反応を引き起こした。



体の伴わない頭でっかちを生む主因の一つに、授業形態の問題が挙げられる。座って受動的に講義を消化するだけの「座学」と呼ばれる形が大学の講義の大きな部分を占めるが、その際に学生に強いる受身的姿勢が記憶偏重・知識偏重の傾向を生むという批判がある。近年は、その欠点を現場体験を重視するフィールドワーク型授業やインターンシップ型授業の導入により是正しようという試みがさまざまになされ、行動しながら考え、考えながら行動する形の実践的知性を育む動きが盛んに見られる。しかし、さらに、そこに「教養」という要素を加えて、この種の動きを広げ、また

深化させることが、教養研究センターの目指すところである。そこで、同センターでは、かつて「教養」の中心を成した「文学」の授業を、「フィールドワーク」型や「インターンシップ」型に見られるような積極的参加型授業に変貌させることにより、学生たちに現代人に必要な「教養」を伝える試みを始めた。



今の大学において「文学」の授業はそれほど重視されておらず、周縁的な存在となっている。それは、「座学」という形を取り身体性を軽視する従来型の授業が抱える問題を浮きぼりにする。人気のある「文学」授業は不可避免的に大教室で行われるため、担当講師が一方的にしゃべり学生が受動的にノートを取る「座学」型の授業となる。他方、「文学」は少人数の講座においても、従来型の授業形態を取り、知識・解釈の問題に特化して、身体性の欠如する頭でっかちの講義になりがちである。その結果、「感動」と「想像」と「創造」という頭と体の両方を巻き込んだ全人的・統合的的行為と不可分の関係にある「文学」の「身体知」的魅力が今大学の授業で伝えられることは少ない。

しかし、「文学」というメディアには、言語を用いて社会と文化と伝統を築いてきた人間文明の蓄積が集約されており、大きな感動を与えつづける名作が数多く残されている。そして、近年の『カラマゾフの兄弟』新訳のベストセラー化が示すように、名作を読みたいという欲求、そこから人生の智慧を学びたいという欲求は、社会の中に根強くある。また、同時に、「文学」の多くの部分は「物語」を欲する人間の根源的欲望に基づいているために、視野を広げて若者に人気のあるライトノベル、ケータイ小説、ゲーム小説などにも目を向ければ、「文学」という営みには現代性も十分に備わっており、「文学」を通して現代社会を学ぶことも可能である。逆に、「文学」を通して「生きた歴史」を学ぶことも可能である。慶應義塾大学においても、人気のある「文学」授業の履修者は 400 人を超え、その豊かな可能性を示唆している。

さらに、先述したように、「文学」という営みには、「感動」、「想像」、「創造」という、頭と体の双方を巻き込んだ統合的知性の育成に繋がる「全人性」が備わっていると同時に、「文学」教育は、現代社会、とりわけわが国の教育で問題となっている「言語力」の不足の解消の大きな一助となることも出来る。(これは「慶應義塾総合先導プラン 2002-2006」に示された「語力教育の充実」と目的を共有する。)また、「新しい文学教育」は、読解力育成とともに創作・発表活動を通しての「創造力」育成・「表現力」育成にも貢献することが出来る。そして、学生たちが集団で創ったものを公に発信する活動を行うことにより、「協調力」や「行動力」も育成される。石原慎太郎や田中康夫のような「創造性」・「発信力」・「行動力」に秀でた政治家が、文学者としてそのキャリアを始めたことの意味はもっと考えられるべきだろう。



このように「新しい文学教育」の必要性は明らかである。残る課題は、文学の可能性を生かした授業をどう具体化するか、である。言うは易く行うは難い問題であり、われわれはパイオニアとして試行錯誤を繰り返さなくてはいけない。しかしながら、教養研究センターでは、慶應義塾未来先導基金の援助を受けて、2007 年度、2008 年度と 2 年続けて、それぞれ一週間ほどの長さで計 18 時間の文学実験授業を行うことが出来た。(2008 年度文学実験授業の報告書は、現在作成中である。)そこでは、作品読解・解釈という「頭」の訓練に加えて、日本では不当に軽視されている言葉の発信力育成に不可欠な朗読のワークショップ、臨床心理学専門家による感性を

磨くための身体ワークショップ、アーティストによる古典芸能、演劇、ダンスのワークショップ、担当教員による創作ワークショップが試みられ、文学を通じた「身体知」教育の実験として大きな成功を取めた。「新しい文学教育」を通して、「教養」と「言語力」と「創造力」と「協調力」と「行動力」が磨かれ、でっかい頭としなやかな体に支えられる統合的知性が育成されることが分かった。参考資料の授業アンケートが示すとおり、単位も与えられない実験授業に参加した受講生たちは熱狂的な反応を示した。

かくして、第一歩は踏み出された。今後は、学生のみならず実社会との対話を欠かさず、社会への貢献ということを常に意識しながら、すなわち「実学」としての「文学教育」という目的を忘れることなく、そして常に改善の努力を怠ることなく、常にチャレンジングな課題を取り入れながら、「新しい文学教育」の試みを続けていく決意が固まった。

2009 年 2 月 22 日

1 教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」の開始

教育の現場で身体はどんな意味を持つのだろうか。自分を知り、他者と交流する際、私たちは書かれた「言語」以外に身体を使う。同時に知を獲得し、理解し、伝える作業はすべて身体を経由している。つまり「身体知」は言語知・社会知の基礎となる。この「身体知」が危機に瀕している。テクノロジーの波の中で希薄化する身体存在、コントロール不可能な精神・感情・不安といった諸現象は、教育現場のみならず、「キレル」若者に代表されるように社会の中で広く、切実に意識されている。

昨今、哲学的および芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がいろいろな場面で語られるようになってきている現状もその反映であろう。それらの言葉の内包する複雑さは、教育の場におけるこの新たな知の定義の必要性を突きつけると同時に、学生が受動的に講義ノートをとるだけの「座学」型授業に限定されない知のあり方が、現在求められていることを物語っている。危機と変革の時代には、全人的な知が必要とされるからである。

論理的思考力が感性や身体性と手を携えて初めて真の知性が生まれることは、言を俟たない。考えることは、身体に触発され、身体と不可分の全人的な行為以外の何ものでもないからだ。さらに、身体は、フーコー以降の現代思想でも、脳科学や認知科学でも、芸術や臨床心理学の領域でも、大きな注目を集めながら、それぞれが社会構成主義、科学主義、体験主義というような異なる枠組みの中で研究・教育が進められてきた。しかし、相互間の交渉はいまだに乏しい。その意味で、まさにそれぞれの成果を研究のみならず教育の実践を通して統合する試みがなされるべきときがやってきた、と言えるであろう。つまり教育に関わる者が、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、意識的に相互の壁を突き崩して統合的な教育を目指すことこそが、必要となる。

1) 一般に膾炙する身体論として、内田樹、養老孟司、鷺田清一らのものがある。学的には現代身体論の祖として、モーリス・メルロ・ポンティとミシェル・フーコーが挙げられる。

2) 2008年3月10日付「読売新聞」(東京夕刊、13頁)に「身体知」と慶應義塾大学の文学実験授業の試みが紹介された。

そして、それらの知を伝える新たな授業の形態を模索することが重要になる。慶應義塾においても、各領域でフィールドワークを取り入れた少人数授業やインターンシップに代表される体験型実務教育が徐々に広がりつつあり、大きな成果を挙げている。国内外でNGOの活動に参加することや、海外での留学経験を通して、未知の社会や文化の中に身を置くことも、全身で学ぶまたとない機会となる。これらの新しい教育の試みを推進し支援すると同時に、さまざまな効果的な授業形態と場の可能性を探っていくことが、大学教育の未来のために不可欠であろう。



2002年7月に慶應義塾大学に設立された教養研究センター³⁾は、そのような見地のもとに、21世紀の中で私たちが再建もしくは発見すべき「身体」とは何であり、それをひとつの「知」とした上で次世代に伝えていくにはどのようにしたらよいかを教職一体となって考える場として、2005年5月に基盤研究「身体知プロジェクト」を立ち上げた。

2005年度はこれまで試みられてきたさまざまな教育現場での活動を振り返ると同時に、教養研究センターとして考えられるべき「身体知」のあり方を模索するための月例研究会を、メンバーそれぞれが順番にオーガナイザーとなって開催した。これらの研究会から見えてくるべき理論構築と両輪を成すものとして、2006年度後期には、実験授業「体をひらく、

3) 時代の要請する、あるいは時代に必要とされる価値観としての教養を探究し、知の蓄積としての歴史の中でその価値観を位置づけ、次世代へと伝達する方法を研究することが教養研究センターの設立目的である。2009年3月現在、所員211名。学部横断的、かつ教職学生一体型の議論の場として、現在さまざまなプロジェクトが活動を展開している。時にその活動内容がアヴァンギャルドであるのも、教養研究センターが、既存のカリキュラムではなかなか実現できない試みを自由に試してみる知的共有地でもあるからだ。研究活動としては、個人ベースの共同研究を支援する「一般研究」、慶應内外に対する高等教育モデルを提示することを目標とした「特定研究」、そして慶應義塾での試みを中心に研究・実践し、そこで得られる知見を慶應内外に広く発信していく「基盤研究」がある。今回紹介する「身体知プロジェクト」は、この「基盤研究」の中の一つのプロジェクトである。なお、教養研究センターの活動については、以下のホームページを参照のこと。http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

4) 2007年度の「身体知プロジェクト」において、武藤浩史はコーディネーターの一人を務め、横山千晶はプロジェクト・メンバーとして参加している。

心をひらく」と題する、身体を用いたワークショップ形式の実験授業を7回行った(コーディネーターは、手塚千鶴子[慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター]と熊倉敬聡[理工学部])。講師には井上ウィマラ(高野山大学助教授)、佐藤仁美(放送大学助教授)および岩下徹(山海塾、京都造形芸術大学教授。なお、各講師の所属と役職は2006年開講当時のもの)を招き、呼吸や瞑想、コラージュや連歌、そしてダンスというメディアを通して、普段あまりなじみのない方法で自分を表現する試みを行った。参加者は、慶應義塾の大学生以外に、教職員、また塾以外の小・中学校の教諭や学生カウンセラーなど多岐にわたり、世代を超えた連携と学びの場もなった。本論文の執筆者である二人、武藤浩史と横山千晶も、学ぶ側としてこの実験授業に参加した。

同時に教養研究センターが2005年度から2年にわたって開催してきた「開かれゆくキャンパス——一貫校の冒険 朗読会」では、「朗読」を通じて、身体知教育の意味を協働で考える場を提供してきた。

これらの活動をばねとして2007年度は、研究と実践の取り組みをさらに統合させ、以下の3点を柱として活動を展開した。

- (1) 月例研究会
- (2) 実験授業「アートで体をひらく、心をひらく」
- (3) 感動教育・芸術教育を考える

(1) では一貫校と大学教員を主体とした研究会を引き続き行うことで、身体知の理論をさまざまな分野から研究している。そして(2)と(3)では、そこで論議された内容を常に実践の場で確かめながら、成果をさまざまな授業に応用し、多くの学生に還元することを目的としている。同時に、その成果を公開することで、慶應義塾から発信される新たな教育のあり方を世に広めることがこの研究プロジェクトの最終目標である。

またすでにカリキュラムの足場があり、その足場を利用して大きな成果が期待できる活動は、慶應義塾150年記念事業の一環である「未来先導基金プロジェクト」事業として申請し、広くその内容を慶應義塾内外に公開し、さまざまな批評を受けることを目指した。その結果2007年度「未来先導基金プロ

ジェクト」として採択されたのが、次に詳しくその一部を紹介する「声プロジェクト」の試みである。

2 未来先導基金採択事業「声を考えるプロジェクト(略称:声プロジェクト)」——「新しい文学教育」の試み

2007年度の身体知プロジェクトは、既存のカリキュラムに身体知の理論を盛り込む試みとして、「声を考えるプロジェクト(略称:声プロジェクト)」を立ち上げ、未来先導基金の事業として採択された。全体の予算額は163万4,000円で、そのうち「新しい文学教育」の実施には62万9,860円かかった。このプロジェクトはその名のとおり「声」と「発話」をめぐる教育プログラムの開発であるが、そのプログラムは以下に示唆される通り身体知に関する知見全体に基づくもので、単に音声のみに限るものではない。

2007年度の「声プロジェクト」は主に二つの活動をその軸に据えた。それぞれ、現行のカリキュラムとタイアップして活動を展開している。

- (1) 新しい文学教育・語学教育——「朗読」と「ドラマ」
- (2) 声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践——大学教養教育における音楽実践

以下、それぞれについて具体的な内容を紹介する。

- (1) 新しい文学教育・語学教育——「朗読」・「創作」・「ドラマ」

「座学」で主として作家や作品の背景についての講義を受動的に聞く従来の文学の授業から離れて、身体を用いた体験・参加型の文学授業を実施することで、大教室の授業や従来の語学教育で足りないところを補うとともに、時代にふさわしい文学教育・語学教育の形を探る。「朗読」、「創作」および「演ずること」を通して新たな文字へのアプローチを図り、将来的には、オリジナルなドラマやラジオ物語の創作をも目指す文学系授業を視野に入れていく。こうして従来の読解中心の文学理解から、体を通した新しい文学理解へと導くだけでなく、文学作品の創作過程に自らが参加するところまで踏み込ん

でいくことで、新しい教育の形態を作り上げていく。以下それぞれの、具体的な内容を紹介する。

(1-1) 新しい文学教育

大教室で行われている「文学」の講義（全学部共通科目「文学—物語・自己・歴史」、法学部教授 武藤浩史担当）の履修者を主たる対象として、夏休みに朗読と身体ワークショップの講師を招いた集中的な実験授業を開催した。前期の授業が終了した直後の8月第1週に1日3時間で連続6日間実施した。ここでは「朗読」と身体に対する気づきのワークショップを経て、文字としての文学の創作過程に自らが参画していくことまでを目指した。「朗読」と身体ワークショップでは、感性を研ぎ澄まして芸術言語と対峙する時に得られる心と体の集中力が人生において大切なものであることが感得された。人間の夢みる能力を考えれば分かるように、日常生活では抑圧されて発揮されない創造力がすべての人間の中に眠っており、文学を通してそれを解放することは創造力全体の育成ともなることが実感された。この試みは、通常学期の大教室授業に足りないところを補い、「マスプロ授業」改革のための実践でもあった。

(1-2) ドラマを通した語学教育

文字によるテキストを実際に声と身体を使ってのディクショ^ン、あるいはコミュニケーションに置き換えることは、頭で理解した内容を身体で表現するという一連の作業である。コミュニケーションとは単なる「言葉」ではない全身活動である以上、身体は語学のクラスで常に意識されるべき存在である。この実践では書かれたものを身体を使いつつ理解し、理解したものを再び自分の身体を使って他人に伝えるという一連の訓練を、新たな知の領域として学生たちに周知させる試みとして、「ドラマ」を教材に用いた。本年度は外国語教育研究センター設置、英語「ドラマクラス」（全学部共通科目、法学部教授 横山千晶担当）をその実践の場として、新たな語学教育を模索する地場とした。この授業はワークショップの形式で行われるものであり、クラス内でのグループワークそのものがすでにコミュニケーション構築の場である。

またクラスの中で作り上げられたものに関しては、

その成果を2007年12月13・14日に英語のドラマ公演として日吉キャンパス来往舎にて一般公開した。結果として、外国語のみならず広い意味での声と身体を使ったプレゼンテーション能力を各学生が獲得した。

(2) 声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践—大学教養教育における音楽実践

声と楽器に実践を取り入れた授業を行った。この授業実践は、声を通じて、学生に共同実践の体験を行わせ、歴史・文化・言語の総合的な学習の機会とすることを目的とする。具体的には合唱クラスとオーケストラ・クラスの2クラスにおいて、それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、そのための声や身体の学びを進めた。最終的には2008年1月9日に2クラス合同の公開演奏会が学内・地域に開かれたかたちで披露された。

本事業は、日吉キャンパスで展開される総合教育科目「音楽」（商学部・経済学部開設、商学部、佐藤望担当）の枠内で行った。総合教育科目「音楽」における身体知的教育活動は、2000年よりその試みを開始し、年々教育効果を図りながら、新しい大学教養教育におけるメソッドの開発を進めてきた。その効果は、第一義的には、学生にとって協働の喜びを得る体験の機会となるとともに、自身の声を通じて歴史文化の深みに直接触れるという点にある。同活動は、身体知の実践の成果を学内と地域に披露してきた。こうした緊張感を与えられる場面の存在により、学生にとっても得難い感動体験を与えてきている点は、(1-2)のドラマクラスと共通する。

3 新しい文学教育

ここでいよいよ、この教養研究センターの身体知教育の試みの事例を詳細に紹介し、その可能性の豊かさを例証しよう。

「声プロジェクト」の一環である「新しい文学教育」（担当は武藤浩史）は、2007年8月6日から11日までの6日間（1日3時間、計18時間）、慶應義塾大学日吉キャンパスで、20世紀随一の英国作家とたたえられることの多いD・H・ロレンスの小説『チャタレー夫人の恋人』を題材とする文学実験授業「文学と身体知」として実施された。

表1 文学実験授業の時間割

	第1限 (10時-11時30分)	第2限 (11時45分-13時15分)
8月6日	オリエンテーション・趣旨 (武藤浩史)	解釈と身体 (武藤浩史)
8月7日	身体ワークショップ (佐藤仁美)	身体ワークショップ (黒沢美香) 13時45分まで
8月8日	ヴォイス・トレーニング (濱野久美)	朗読 (岡摂子)
8月9日	朗読 (岡摂子)	講談 (神田陽子)
8月10日	創作・書き換え (武藤浩史)	創作・書き換え (武藤浩史)
8月11日	身体ワークショップ (黒沢美香)	学生発表会 (朗読・講談・創作・書き換え)

まず、現代において文学を通しての全人的教育を試みる際に気をつけるべきこととして、一つ指摘しておくべき点が挙げられる。50年前と比べて格段に変化したと思われる読書能力である。テレビ放映が広まって間もない1955年のイギリスで出版された20世紀を代表する文明批評家F・R・リーヴィスの名著『小説家D・H・ロレンス』では、ロレンスの文章をまとめて長く引用して、その実例によって、ロレンス文学の天才性を示そうとする姿勢が目につく。つまり、リーヴィスは自著の読者の読書力あるいは文学作品鑑賞力を自明のものとして信じている節がある。大衆文化、すなわち、広告、ラジオ放送、大衆新聞や大衆文学などによって文学および文化が墮落したことを嘆くリーヴィスではあるが、まだまだ少数ながらも文学言語の鑑賞能力の高い読者の存在と彼らの可能性を教育の現場で信じることができた。残念ながら、これと同じことを、現代人、特にテレビとゲームと「携帯」とポピュラー音楽にその感性を育まれた今の若者に求めることは無理だろう。リーヴィスのロレンス論と平行して1950年代のイギリスで起きたことは象徴的だ。テレビの普



及と平行して、同時期の1956年に、ビル・ヘイリーのヒット曲に材を得たロックンロール映画『ロック・アラウンド・ザ・クロック』がイギリスの青年の間で一大センセーションを巻き起こした。若者たちは映画館で躍ったり宙返りをしたりして大騒ぎになったという。座って動かない姿勢で活字から文化的刺激を受ける時代から、映像という動くイメージと体の動きを伴ったリズム主体の音楽の時代への移行がいよいよ本格化し始めたことが、そこに象徴的に見てとれる。誤解のないように言っておくが、これは現代の若者に対する批判ではない。むしろ、映像に対する感性やリズム感に秀でた若者ならではの貴重な能力を文学言語の遺産と結びつけることで、時代の流れを見据えながらも時代に阿らない^{おもね}全人教育を目指すということである。

だから、現代における文学&身体知教育は、身体的アクティビティを取り入れ、それを通じてリテラシー育成に繋がるような方法が望ましいことが分かる。また、身体知教育は、身体的活動に特化するのではなく、「現代思想」的なものの見方、「文学理論的」なテキスト解釈術を育んだ上で、それを身体的なもの^と繋げてゆくという姿勢を忘れてはいけない。そこで、文学実験授業のために、表1のような時間割でプログラムを作ってみた。表の中の人名はそれぞれの時限の担当講師である。

受講生は、事前に応募した者が15名おり、内訳は、通学過程の学生が、大学1年生から大学院修士課程2年生まで11名、通信教育部の学生が、卒業生も含めて4名。その卒業生は、全員、通信教育部の学生団体であり武藤が担当講師を務める「英語

読書会」に属している。その他に、噂を聞いて飛び入りでやって来た者が、教員、編集者、卒業生など計9名。また、講師の内、黒沢、濱野、佐藤の三氏は、担当以外の授業にも部分的に参加した。この中で、通常学期の「文学」（武藤担当）の授業を履修する通学課程の学生と長い間「英語読書会」に属する通信教育部の卒業生は、武藤の講義から『チャタレー夫人の恋人』の「現代思想的」解釈を理解している。それ以外の者でも、武藤のいずれかの授業を取った者は、武藤の文学テキストの読み方の基本は分かっていると思われるが、「現代思想」的な『チャタレー』解釈に自信の無い者、経験の無い者を対象にして、この実験授業に先立つ週の土曜日（8月4日）に2時間ほどのプレセッションを行い、階級、戦争とトラウマ、セクシュアリティなど、この小説をめぐる問題の基本を、テキスト細部の精読例とともに紹介して、文学テキストの読み方を伝えた。このようにして、『チャタレー』を中心として文学テキスト解釈の基本を身につけている学生が、さらに言語芸術を体験・体感することにより真の身体知を身につけるべく、本実験授業は実施された。横山は、同僚である法学部専任講師の佐藤元状とともに、授業のサポート役を務めた。

プログラムの内容は、前頁の時間割も合わせて参照していただきたいのだが、次の通りである。

【初日】

初日は、武藤が担当して、第1限では、この『チャタレー』文学実験授業の趣旨を説明した。まず、身体知の3つの意義と一つの危険性を話した。第一の意義とは、人の思考は身体と独立して存在し得ず、



身体や身体性に依存している事実を、近年の脳科学や認知科学の成果が示すことに由来する。人間の知的活動は身体的であり、身体知の訓練と思考力の訓練とは同値であるという重要な事実を、教える側も教わる側も、文系の研究者や学生も、知らなければいけない。また、養老孟司が「からだを使え」と言う背景には、理性と感情および身体⁵⁾の不可分性を説いてスピノザの伝統を承ぐ脳科学者アントニオ・ダマシオや、人の思考が本質的に「身体化され、ほとんどがイマジナティブでメタファー的であり、大幅に無意識でありそして感情的なものが参加している」（『肉中の哲学』、602頁）とする認知科学者ジョージ・レイコフらの仕事があることを知るべきである。すなわち、まずは、信頼すべき最新の科学的研究の結果として身体知の意義があり、それは実践面においては、いわゆる「知的活動」と身体アクティビティを同一レベルで相互啓発的に合一させようとする身体知教育の正当性・必要性の証左となる。人の思考が本来身体的なものだとすれば、身体経験を豊かにすれば思考力が豊かになり、また「その逆も真」であるはずだからだ。

つづいて、身体知の第二（教育現場的）と第三（歴史的）の意義を学生たちに伝えた。まず、社会の中で、一方通行的な講義を受動的に聞くことから成る従来の「座学」的授業形態への批判から、現場体験型・参加型の授業が求められており、ここで展開する身体知教育はその社会的需要に応えるものであることを、二番目の意義として挙げた。しかし、それが狭い意味での実学志向に支配され、専門職的知識・職場的知識の開発に限定されるのであれば、それは全人的な視野を欠いた「道具的理性」の陶冶に過ぎなくなってしまう。そこで、歴史を振り返り、冷戦に加えて過度の現実主義路線をとった政党政治もたらした1950年代イギリスの閉塞的状況の打開を目指して新しく生まれた英国の思想家たちが、感性や倫理性を統合的に内包した身体知を提唱しており、その影響が高い環境倫理意識や市民的政治意識に代表される現代イギリス社会の成熟にも繋がっていることを指摘した。そして、彼らの身体知のヴィジョンの中には、文学、とりわけロレンスの作品が伝える身体知への高い評価が含まれていることを指摘した。このことによって、歴史的に、身体知の意義が

確認され、同時にロレンスのテキストを使う意義が確認された。

しかし、ここで、身体知教育の大きな危険性についても、語る必要があった。前に述べたように、私たちが目指す本当の身体知はそれを常に「現代思想」的洞察と繋げる努力をして、弱者からの視点を忘れないようにしなければならないのだが、祭などでの舞踏的熱狂を考えれば分かるように狭義の身体知には強い興奮を喚起する情動的な力が備わっているために、熱狂・興奮・高揚以外の要素が忘却されることで身体知的なものが強い暴力性・攻撃性を帯びることが往々にして起こる。幸い、文学と身体知との繋がりの危うさに触れた作品として、私たちの手元には、村上春樹が1995年のオウム真理教地下鉄サリン事件について書いたノンフィクション作品があり、学生のための導入テキストとして用いることができる。武藤は、その一つ『約束された場所——Underground 2』を選び、そこからの引用を学生たちに配るハンドアウトに載せて、それを基に自分の考えを述べた。オウム真理教は、そのヨーガ系の身体修行が大きな磁力となって多くの人を惹きつけたが、村上のテキストが示唆するのは、現代社会に対して抱く違和感から自己の深みを探求し物語的世界観に作り上げるという点における文学的営為とカルト宗教の近さに対する危機感である⁶⁾。オウムにヨーガ系修行という身体知があったように、文学テキストにも感動という身体知があり、共にそれは物語的世界観へと繋がってゆく。村上が『約束された場所——』の中の河合隼雄との対談で明らかにしているのは、オウム真理教のような⁷⁾身体性から世界観への短絡、つまり身体や想像力を通して深いものを追求することが単純な物語的世界観に結びつくことの怖さである。その原因となる背景として、世俗化し複雑化しメディア化した現代社会においては、信じられる世界観と世界に参加している実感を持ちにくいことが挙げられる。深いレベルでは何も信じられず表面的な情報をメディアから受動的に受け取るだけの

5) 1950年代に活躍した英国の思想家とロレンスについては、武藤の拙稿「『チャタレー夫人の恋人』の過去・現在・未来——もう一つの（ほぼ）50周年」（『英語青年』2007年9月号、322-325頁）がある。

6) 物語というのは人間に本来的に備わる思考形式であり、かつ殆ど必然的に結末を持つ別世界であることから、終末論的カルト宗教と親近性がある。

多くの不安に満ちた現代人が、ある強度を備えた身体体験を通して「実感」を得ると、それに付属する世界観に飛びつきやすい。だから、しばしば破壊的結果をもたらす安易な世界観に繋がるような狭義の身体知は、歴史性や社会性や倫理性を無視したエセ身体知として気をつけなければいけない。真の身体知はバランスのとれた歴史認識や社会意識に裏打ちされなければならない。

そう話してから、最後に、坪井秀人の名著『声の祝祭』の付属CDに収録されている太平洋戦争中の放送戦争詩の一部を流して、朗読というこの実験授業の中心を占める身体的行為がメディアを通して全体主義プロパガンダに用いられた実例を聞かせ、歴史知の大切さを実感させた⁷⁾。

このように、その危険性も含めて身体知の意義を語った後の第二限では、「おれのチャタレー」と称して、参加者がそれぞれの解釈を話し合った。これは、身体的ワークショップを始める前に、作品解釈という頭の作業の大切さをもう一度体験させて、両者を繋げることこそが真の知識——広い意味での身体知——へ至る道であることを確認するためである。

さまざまな観点からさまざまなレベルのさまざまな解釈が提示され、それぞれについて質疑応答や議論を楽しんだ。その一部を紹介しよう。最も素朴なものとして、文学テキストを味読するのは初めての経験だったので言葉の力強さに驚き、とりわけ自然描写の美しさに圧倒されたという、それはそれなりに嬉しい感想もあった。比較的多かったのは、やはり「触れること」や「優しさ」など、小説のキーワードをめぐってのもので、それも単にテキストの表面的な動きに流されて読むだけでなく、対抗的だったり独創的だったりする読みも提示され、多彩な解釈が開陳された。「触れること」が、頭と体の繋がり——つまり広い意味での身体知——の大切さを指し示す中心テーマの一つであるという認識は全員が共有

7) 歴史観抜きの朗読教育の危うさを指摘するのが、大津雄一「何のために——『平家物語』群読の危うさ」（大津雄一、金井景子編著『声の力と国語教育』[早稲田大学教育総合研究所、2007年]所収）である。この論文では、戦争中に国民精神高揚のために群読が推奨された歴史を説いた上で、「声」への信仰と安易な群読教育への警鐘を鳴らしている。ただし、素材とその読み方に含まれる危険性を一方的に排除するのではなく敢えてその危険性に目を向けさせることも、現場では必要であろう。それこそが歴史知の教育に繋がるからである。



しつつも、ある者は、さらにもう一步進めて、その心地よさと共存する「触れること」による他者との距離の消滅に由来する危険性を語り、またある者は、幼児的な触れあいとして作中否定的に描かれるクリフォードとボルトン夫人に関して、この幼児返りが病や傷から回復する一段階として必要であると、テキストの表面的流れに反してクリフォード寄りの意見を述べた（後者は、さらに、後の創作の作業で、「がんばれクリフォード」という短編に結実した）。

チャタレー夫人が猟番の「優しさの勇氣」に触れた箇所注目し、その「優しさ」を「触れること」に繋げて、それが近代批判に際して仲間との連帯を強調するウィリアム・モリス的な社会主義の伝統の継承ではないかという歴史的文脈を意識した意見もあった。また、その問題を男性的視点から追及した19世紀の思想家と対照的に、ロレンスはコンスタンス・チャタレーという女性の視点を通し、また「優しさ」という女性的概念を導入することで、「女性性」の強調をその伝統に付け加えるという貢献があったのではないかと指摘もあった。このコメントに対しては、ロレンスの「優しさ共同体」にはファシズムに結びつく側面もあり、また、コンスタンスが猟番の「優しさの勇氣」を讃えたすぐ後で、猟番が「優しさ」を理解しない連中への殺意を洩らす点からも分かるように、ロレンスには優しさと残酷さを使い分けて人を魅する典型的に危険なカリスマ的レトリックがあるので、それを認識することが大切だと応えた。

第2限「おれのチャタレー」の最後は、2007年春にフランス・セザール賞（米アカデミー賞に相当する権威ある賞）を5部門にわたり受賞した名作映画『レディ・チャタレー』を紹介し、その意義を論じて、女

性監督パスカル・フェランの「おれのチャタレー」を解説するとともに、これを筆者（武藤）の「おれのチャタレー」と重ねて、締めくくりとした。そのフランス公開時のプログラムに引用された「生の静けさ」の大切さを伝える『チャタレー』第二稿の一節の翻訳をハンドアウトに載せ、それが、寡黙と抑制と凝縮の手法により詩的に激しい愛の静けさを伝えるこの映画のコンセプトと合致することをまず指摘した。

『チャタレー』第二稿より（武藤拙訳）

生はとても優しく、静かで、捕まえることができない。力づくでは手に入らない。力づくでもものにしようとすれば、生は消えてしまう。生を捕まえようとしても、塵しか残らない。支配しようとしても、愚か者の引きつり笑いをする自分の姿が見えるだけだ。

生を欲するのなら、木の下にやすらぐ鹿の親子に近づくように、そっと、生に向かって、歩を進めなくては行けない。身振りの荒さ、わがままで乱暴な主張が少しでもあると、生は逃げていってしまい、また探さなくてはならなくなる。そっと、優しく、かぎりなく繊細な手と足とで、わがままさをもたない自由で大きな心で、生にまた近づいて行って初めて、生と触れあえる。花をひったくろうと手をのぼすだけで、花は人生から永遠に消えてしまう。わがままさと貪欲さに満ちた気持で他人に近づいてゆくと、手の中に掴むのは棘だらけの悪魔で、残るのは毒の痛みばかりになる。

しかし、静かに、我意を捨て、深い本当の自己の充溢とともに他人に近づくことができる。人生で最上の繊細さを、触れあいを知ることができる。足が地面に触れ、指が木に、生き物に触れ、手と胸が触れ、体全体が体全体と触れる。そして、燃える愛が互いに貫入する。それこそが生。わたしたちは皆、触れることで生きている。（D. H. Lawrence, *The First and Second Lady Chatterley Novels*, Cambridge University Press, 1999年、323頁）

それから、映画の最後に置かれたチャタレー夫人と猟番の長い会話を精査して、そこで強調された「男の中にある女らしさの大切さ」というテーマに注目を促して、この映画が女性的感性を生かして映像と演技と音楽の三要素を緻密に見事に連携させた美的

な意味での傑作であるとともに、解釈レベルでも「女性性」の大切さというテーマ——それは原作小説の中に確かにあるが、監督の解釈によりさらに強調される——を最後の場面で見事に浮かび上がらせていることを指摘し、女性監督によるこの映画が、女性的視点からの、感性と解釈の見事な結合例であることを明らかにした。そのことは、すなわち、この映画がこの実験授業の目指す身体知の優れた実例であることを示している。

【2日目】

2日目の身体ワークショップは、臨床心理学を専門とする放送大学准教授、佐藤仁美氏による「触れる」をテーマにしたワークショップと、世界的なダンサー黒沢美香氏による『チャタレー夫人の恋人』に想を得たワークショップである。以下全員に言えることだが、講師には前もって拙訳の『チャタレー夫人の恋人』を渡して読んでもらい、それに基づき授業内容について打ち合わせを行った。この日の身体ワークショップでは、読むことをそれ以外の身体経験に繋げていこうとする試みが、身体経験についての読みの可能性、身体経験としての文学体験を深めることとどう繋がってゆくかを確認するのが、主たる目的となる。

佐藤氏のワークショップは、視覚偏重の人間という動物、とりわけ視覚メディア氾濫の中で生きる現代人に対して、「触れること」を通じて、日ごろは気づかない体の感覚に注意を集中させ、自己そして他者についての意識・感受性を深めようとするものだ。まず、参加者を椅子に座らせて、自分の体の感覚、とりわけ触れているという感覚に注意を向けさせる。続いて、体が最大限のものに触れるような姿勢を取らせる。多くの参加者は床に寝転ぶが、壁に体を付ける者もある。これが準備段階で、その次に、人に触れるアクティビティに移る。まず、部屋を自由に歩かせ、そこで出会う他人といろいろなやり方で挨拶させ、言葉と身振り・触れあいの相補関係を確認させる。それから、手を繋いで輪を作らせ、他者の手に触れる・触れられるという感覚に神経を集中させる。その後で、ペアを作らせ、各人の持つパーソナルスペースを確認させながら、慎重に、さまざまな触れあいを実践させてゆく。指で触り、手



のひらで触り、肩に触り、背を向けた相手の背中に触る。わざと倒れてくる相手を支えさせ、背中合わせに触れあわせ、隣同士で触れあった状態で座らせる。さらに、オプションとして、相手と抱きあう、相手を後ろから抱くなどの活動もあり、触れることの大切さと同時に、ある場合には、親密感に威圧感が、心地よさに自分のスペースが侵入される居心地の悪さが混じりあうなど、触れるという行為の多様性を体験させた。また、授業の冒頭で、参加者に紙を配って「触れる」ことのイメージを各人に考えさせ、最後にはワークショップを振り返ってその印象をまとめさせるなど、言語化によるまとめを心がけた（授業内配布物①、33頁を参照されたい）。

結果として、参加者からは、「触れることにより頭で考える以上に優しい思いがあふれて、ロレンスの正しさが確認された」といった素直な印象から、「触れることで今ここに生きてあることを他人の生を通じて痛感するとともに、自分の弱さが認識できた。メラーズが『また生きることが始まった』という気持ちが如実に感じられた」、「触れることは、それだけに止まらず、匂いや気配・空気感受到に繋がって、五感全体の行いとなる」といった興味深い意見も出された（五感の問題は、この実験授業で常に前景化される重要なテーマとなる）。また、「同性にさえこれほど触れたいのに……」という意見が男子学生から出された。これは、異性愛を志向する発言のようにも見えるが、同時にセクシュアリティの広がり示唆するものとしても解釈できる。これは筆者（武藤）の印象だが、触れるワークショップを行う——筆者が佐藤氏の触れるワークショップに参加するのは、2006年度の慶應義塾大学教養研究セ



ンター身体知プロジェクトでの実験授業（2007年1月22日）以来二度目——と、日ごろ、触れるという行為がいかに異性愛制度の中に取り込まれて、異性愛的な意味づけを与えられてしまっているかが痛感される。この種のワークショップで、心を集中させて、男の大きな手、大きな体に触れてみると、日常的には男性の異性愛者として生きている者にも、同性に触れることの驚異が体験できるだろう。だから、それは、「現代思想」的セクシュアリティ観を体で確認するという貴重な機会にもなる。

さらに、このようなワークショップで触れあいの体験をすると子育ての記憶が甦るとい通信教育部の学生のコメントや、前日の第2限で出されたクリフォードの幼児返りに連結させるコメントも出されて、全体として、参加者がワークショップ体験を、自らの人生経験へ、作品解釈へと、多彩にしかし有機的に繋げながら広げてゆく有様が確認された。当初、触れるという生々しい体験の危険性を危惧して、経験豊富な臨床心理学者にワークショップを担当してもらったが、その甲斐もあって、全体として、参加者の反応は非常に肯定的であり、また、文学体験のためにも有効だった。また、2日目のこのワークショップで、受講者間の心理的距離感がぐっと縮まったという副次的な効果もあった。

つづく第2限の黒沢美香氏のワークショップは、準備運動の後で参加者を椅子に座らせてダンスの振り——黒沢氏の言葉によれば「経路」——を伝えることから始まった。椅子に座ったり寝転んでその椅子の上に足を上げたりそのまわりでゆっくり動いたりする振りについては、特に詳しくその意味や理由を説明することもなく淡々と進められたが、時折投げ

られる氏の指導の言葉から、徐々に目指すものが分かってきた。それは、心を集中させて自分の体を味わうことの大切さである。振りは全員に共通していても、各人は他人と合わせるのではなく自分の速度で、自分の体に耳を傾けながら動くことを、氏は重視する。また、胸を張る動きの時には「胸をもりもり大きくしてオッパイを向こうの壁に届かせる」と言い、足を注意深く下ろさなければいけない時は「足が初めての地面を感じ、初めての体重を感じる」と言うように、言葉のイメージを活用して、新鮮な気持ちで体を体験させようとする。その結果、緩急、動静、緊張と弛緩を含む大きな流れの中で、集中して体に向かい合いながら密度濃く動いてゆくことが、とても重大な、運命性を帯びた、人生の基本であることが分かってくる。茶会において一つ一つの小さな動きが重大事になるのと同じだ。自分の身体感覚を研ぎ澄まし、自分の動きの流れを作って、真正な時間——氏の表現を借りれば「がさつかない、しっとりした時間」——を創造する。それが彼女にとっての「踊り」であり、おそらく「人生」でもある。

第1限同様、セクシュアリティ体験もそこに絡んでくる。振りの中には、横たわって足を上げる、横座りするなどエロティシズムを内に含む動きがあるのだが、その部分に注意を向けてしまうこと、それを意味づけようとしてしまうことは避けなければいけない。むしろ、黒沢氏は、「ずらす」こと、「決断すると同時に揺れる」ことを重視して、「清潔感のある猥雑」を目指す。要は、「何をするつもりがなくても、体には意味が充満しているのだから」、エロティックなものに関する既成イメージから常に逃げることにより、あるがままの体の自然なセクシュアリティを尊重するということなのだろう。このセッションでは、男子学生の踊りの女性的な魅力が目立ったが、そのことも考え合わせれば、異性愛制度に縛られたセクシュアリティからの解放へと体の動きが向けられていることが分かる。

さて、参加者が振りを覚えたことを確認すると、次に、黒沢氏は、音楽を流しながら、踊らせた。その際、氏が強調したのは、音楽のムードに合わせてやるのではなく、一つ一つの体の動きを味わい、その重大さを感じつつ動いてゆくことだった。これを2回繰り返してから、次に、いよいよ、振りを



『チャタレー』の朗読と合体させることを提案した。朗読される箇所は、3日目の岡氏担当の朗読授業の回で使われる167頁から174頁（ちくま文庫）までに決定した（授業内配布物③、34-35頁を参照されたい）。コニーが、鳥小屋で猟番が槌を打つ音を聞いて、運命に導かれるようにそこへ通じる小道に足を踏み入れる場面である。ここでも、作品の表面的な意味の動きに合わせて踊るのではなく、踊りも朗読の声も表面的に付与される意味に先行してすでに意味が充満する体なのだから、余計な思い入れを排して、体の一つ一つの動きを味わうことが大切であるとされた。一人の学生が朗読し、彼の朗読と平行する形で、参加者が踊りを踊るというセッションを2回行った。

これが驚くべき結果をもたらした。踊る身体と朗読されるテキストの間に表面的な意味の1対1対応はない。だが、深いところで、動きと動きが感応した。深いレベルでの体の欲動がストーリーを動かすとともに文体を決めるという特徴が『チャタレー』の芸術言語には備わっている。その深さにおいて、朗読されたその小説言語の動きの身体性が、集中して自分の体の声を聞きながらゆっくり静かに踊る踊りの身体性と呼応しあった。そして、このような集中と自由の深さの中で、ダンスの肉体性と文学テキストの肉体性が共鳴する時、生の動きとしか言いようのない生々しさが立ち現れる。表面的な性的欲望よりもはるかに深い、体がこう動きたいと発する声に静かに耳を傾けてそれに従うことの運命性が表出される。自己意識に先んじる生としての体がそこには感じられた。

黒沢氏自身も、二つの肉体性が「ハモッて」しまっ

たと言い、その際に現出する「リアリティ」に驚嘆した。氏からは、後にメールで、次のような感想をいただき、言語芸術と身体芸術の共振性が確認できた。

言葉で旅できる人はダンサーなのかもしれません。理解が早く身体をきちんと運んでくれる乗り物に上手く乗れてその乗り物を適宜な速度で運転できます。……きっと文章を編んでいくのととても近い作業だと思いますがダンスは自らの中を掘り起こし想起し揺り動かし溶かしているうちに単なる身体が次第にダンスの身体に変容していきます。新たな可能性の鉱脈と出会った思いで帰ってきました。

学生の中には、黒沢氏の言葉の意味を的確に掴んで驚くべき踊りを見せた者が数名いた。その一方で、たしかに、一部にはとまどいを見せる参加者もいた。しかし、彼らも、6日目（8月11日）の第2回目の黒沢氏のセッションでは、ずっと慣れてきて、はるかによくなった踊りを見せることとなる。

ここで、先回りして、黒沢氏の2回目のセッションについても、まとめておこう。最終日に当たる6日目第1限に行われた2回目も、前回の振りを若干修正しかつ新しい動きを最後に付け加えたことを除けば、1回目と大体同じ内容だった。ただ、参加者の感想からも、黒沢美香氏のコメントからも、彼らが前回よりも慣れて、踊りにより深く没入しているのが確認された。例えば、参加者の一人は、「自分のやりたいようにやるのがやっとできました」と喜びの言葉を綴った。黒沢氏は、氏独特の表現で、「動きにトゲトゲがなくなり、いい天気の日には川が流れ



ていくような緩やかな速度があると同時に、パンパンと思いついた動きがあった。言葉に酔って『私のお部屋に入っていく [内向する]』のではなく、外に外に行く感じの清潔感があった」と述べた。最後に、筆者が、「言葉もダンスも肉体の一部で、そこには緊張したり緩んだりあちちに行ったりこちちに行ったりする流れがある、その動きが生きていることそのものであると実感できたのではないか」と参加者の気持を代弁して、締め言葉とした。

【3日目】

3日目と4日目の授業は、声を出して表現することが主体となる。この2日間に、ヴォイス・トレーニングに1時間半(8月8日第1限)、朗読に3時間(8月8日第2限と8月9日第1限)、講談に1時間半(8月9日第2限)を割いて、準備(ヴォイス・トレーニング)、「本番」(朗読)、そして、その後で日本の話芸と繋げてさらなる発展(講談)を試みるという3部構成となっている。身体経験としての読みの可能性を探求することで、身体と感性がどう変化し、それが身体経験について書いたロレンスの小説を読む力にどのような影響を与えるかを測ることがこの2日間の目的となる。

濱野久美氏によるヴォイス・トレーニングの位置づけは、声を出すための準備訓練的なものであったが、濱野氏がヴォイス・トレーナーであると同時にゴスペル・クワイアーの指導者でもあることから、いくつかの副産物が生まれた。声を良く出すための身体訓練の概容は以下の通り。さまざまな運動を通じて、体をリラックスさせ、胸郭を広げ横隔膜を下げることで、無理なく大きく空気を吸い込ませ



る。次に、吸い込んだ空気を息として長く出し、その息の上に声を乗せる感覚で発声する。その際に、喉の奥を広げて、咽頭原音を喉や口や鼻腔できちんと共鳴させることができるとよく通る美しい声になる。要するに、体全体と呼吸と息と声と喉と口の形を解放させ整えればいい声が出るということだ。また、氏自ら、頭声と胸声の違い、開鼻腔音と閉鼻腔音の違いを示し、参加者にも、それらの違いや母音と子音の発声メカニズムを体験させ、声を出す自分の体を感じることを大切さを説いた。体と声を解放させることが自己を愛することに繋がるというのが氏の哲学で、たしかにそのことを実感できるワークショップだった。学生のみならず、声を使うプロフェッショナルであるべき教員の訓練にも効果的であろうと思われた。

濱野氏が授業の冒頭と最後にやった試みもまた興味深いものだった。冒頭で声と自己の問題に触れた際に、ゴスペルの専門家である濱野氏は、その問題をアフリカ黒人の歴史に連結する。文書には残されなかった苦難とその克服の歴史の媒体としての歌う声ははからずも前景化される。W・E・デュボイスやポール・ギルロイが注目する声を通した歴史の問題がそこで提示されるのだ。また、授業の最後では、音楽を奏して、皆なで体でリズムを取らせ、手拍子を叩いて自由に動きながら声を出すという試みをして、場が大いに盛り上がった。声と身体を解放させ、そこに音楽が入ると、歌と踊りの熱い共同体が生まれることを、参加者全員が体験した。歴史的に見れば、この種の動きは民主的な変革の手立てにもなり得るしファシズム的傾向と連携することもある。そのことを実体験できたのは貴重なことだった。身体知の魅力を体験するとともに、身体知の中には歴史



知が含まれていなければいけないことを痛感させられた瞬間だった。

さて、3日目第2限の放送表現教育センター講師、岡慎子氏の授業は、朗読全2回の内の第1回目当たるもので、翌日の『チャタレー』朗読に移る前に、花岡大学作「百羽のつる」という短編を用いて朗読の基本的な心構えが教えられた。それは、表現の問題と日本語の知識の問題の二つに大別される。表現に関して言えば、それは解釈したものを聞き手に伝えるという基本姿勢と「強調」「転調」などの具体的なテクニックから成る。これが正しい日本語の知識によって裏打ちされなければならないのだが、総じて言えば、朗読することは精読することであると実感した⁸⁾。

岡氏は、まず、参加者に順番に物語を読ませながら、朗読とは何かを教えた。それは、五感と想像力を十二分に用いて作品の解釈をし、それを基に文字言語を音声言語に変換して、聞き手の心の中に朗読者の解釈による作品イメージが生々しく広がるように伝えることである。これが、岡氏の信じる「ドラマティック・リーディング」であった。そのためには、まず、朗読者は、全身で作品を感じた上で、作品解釈をしなければいけない。五感の大切さと想像することの大切さが繰り返し説かれた。音楽で言えば、譜読みの部分であろう。その上で、自分の作品

8) 脳科学者と文学研究者の注目すべき共著、川島隆太+安達達夫『脳と音読』(講談社、2004年)では、朗読はただ調子よく朗々と読むよりもきちんと意味を把握しながら読む方が、つまり音と意味の両面からアプローチする方が脳の活性化に繋がることが示唆されている。

解釈を声に乗せて表出しなくてはならない。その際には、作品世界への没入とともに、朗読の具体的なテクニックの知識と正しい発声を含む日本語の正しい知識が必要になる。

「百羽のつる」は次のような文章で始まる(授業内配布物②、34頁を参照されたい)。

冷たい月の光でこうこうと明るい、夜更けの広い空でした。

ここで、岡氏は、「ツメタイツキ」という二つの「ツ」という冷たい音の重なりをきちんと表現することで、聞き手に寒さを伝えなくてはならないことを述べた。寒い時には体が固く縮まるわけだから、「ツ」は、その音が本来持つ冷たさを表現するために、体を強張らせて発音されなければいけない。つまり、全身で、この冒頭文が体現する冷たさを感じて、寒い時の固い体で「ツ」を冷たく発しなればいけないと言う。たしかに、そのような心構えで、「ツメタイツキ」と言うと、その音は冷えびえと発せられて、見事な表現となった。まず、文章を全身で感じることを、それを解釈に繋げ、声に繋げること——これが朗読の要諦であった。

さらに、岡氏は続けた。「冷たい月」で寒さを表した後に、「こうこうと明るい」で明るさを、「夜更けの広い空」では広さを、感じ、かつ、伝えなければいけない。冒頭の一文から、温度感覚、光の感覚、空間感覚を全身で感じて、それを声を通して伝えるという総力的な作業が朗読であると。

その他に、「立てる(プロミネンス)」と呼ばれる強調のやり方や、「転調(話の節目で声の調子を変えること)」の大切さ、「助詞力み(弱く発音すべき助詞が強くなってしまうこと)」や「うねり(一つの文の中で不自然な抑揚を付けること)」に注意すべきこと、母音で始まる語を大切に発音すること、数字を大切に読むことなど等、さまざまな具体的なテクニックが教えられた。また、日本語の発音については、『明解日本語アクセント辞典』を紹介して日本語アクセントの特徴を語り、標準語と方言の問題に触れるなどして、音声日本語に関する基本知識の欠けた日本の大学生を啓発した。

このようにして、2頁ほどの掌編の朗読が、参

加者が朗読しそれに講師がコメントするという形で、進められた。朗読は、それが単に大声を出す単純作業に堕さないのであれば、声を発する身体的訓練を超えて、味読、精読の訓練ともなり、活字から情景を想像する能力が未発達なヴィジュアル世代のリテラシー発達のために有効な方法であることが確認された。最後に、参加者全員で、分担を決めて、通して読んだが、若い参加者たちは、岡氏の指導を吸収して、ぐっと気持ちが入り、見事な朗読となった。

【4日目】

第1限は、岡氏2回目の朗読の授業だった。発声練習をしてから、『チャタレー』第八章（167頁3行目から174頁11行目まで）の朗読に入った。ここは、チャタレー夫人が「ジョンの泉」のある小暗い場所で休んだ後、空き地の鳥小屋への小道を見つけて猟番と遭遇し、彼と緊張に満ちた会話を交わす場面である。岡氏はこれを女性（チャタレー夫人）の視点から叙述される「A」と男性（猟番メラーズ）の視点から語られる「B」の二つの部分に分けて、それぞれの箇所をテキスト上にアルファベットで記し、二人の学生に「A」と「B」を分担させて朗読させるという作業を行った。そのことで朗読がよりドラマティックかつリアルになると同時に、物語学にお



ける重要要素の一つである視点の問題が前景化されて小説分析力を身に付けさせるのに有効だった。使用テキストの翻訳者である武藤も、ジョンの泉あたりの冷たく暗い場所に涼やかな水音がかすかに聞こえることが、苦しみの中にありながらもまだすっかり失われたわけではないコニー（=チャタレー夫人）の命の力と重なり、情景描写の中にも深い意味がこめられていることを指摘し、二人の緊張に満ちたやり取りの中にひそかに惹かれあいながら身分の相違等から反発する複雑な心の動きを読み取り表現してほしいという要望を出した。さまざまな点で、前日の掌編よりも深い解釈が求められる難しいテキストへのチャレンジとなった。

この箇所は次のような文章で始まる（授業内配布物③、34-35頁を参照されたい）。

翌日の午後もまた森に行った。

まず、学生から二人が選ばれ、「思い切り表現してください」という岡氏の言葉とともに、朗読が始まった。「翌日の午後もまた」の中の「もまた」という部分に込められた深い意味、すなわち、苦しみの中であって、森に魅せられ、毎日のように森に行かずにはいられないコニーの切々とした気持ちを感じ取って、表現しなければいけない。五感と想像力を働かせ、活字から自分の感覚を呼び覚まして読み解釈してゆき、重要と思う言葉を大切に読むことが肝要である。だから、大切な場所である「ジョンの泉」を大事に読むこと。「氷のような少量の水が…静かに湧きあがっていた」という箇所では、「静かに」で静けさを伝えること。「鈴をころがすような水音がかすかに聞こえた」では、「かすかに」を朗読する声が言葉の意味を体現するように読むこと。コニーが「立ち上がった」時は、「立ち上がる」のを感じながら読むこと。「トントン」という槌の音を聞いてチャタレー夫人は運命の糸に引かれるように猟番の方に向かうのだから、その「トントン」という音の重大な運命性を感じながら読むこと。「近づくとコニーの手足から力が抜けていった」という難しい箇所については、男に惹かれる女の気持ちをよく考えながら読むこと。男と女が違うことを考えている場合は、女の視点「A」と男の視点「B」の間

で「転調」を行い、その違いをはっきり表現すること。以上のような指導があった。

また、セリフと地の文とは違いをはっきり意識しながら読み分けることや、会話では当事者の意識がすれ違う箇所もあるので、そういう箇所はむしろ相手の言うことを無視するように話すこと、なども指摘された。このような指導の下で朗読することは、精読に基づく深い解釈を要求するので、安易な読みができなくなり、読解力の向上に繋がるのが、明らかになった。岡氏の懇切丁寧な指導の後で、最後に参加者全員で順番に朗読したが、読みが深くなり、それに伴い、朗読のレベルが上がったことが確認できた。

4日目第2限の担当講師は、講師神田陽子氏である。古典から、佐野源左衛門が「いざ鎌倉」と駆けつける「鉢の木」の一節と、最も短い出し物である「徂徠豆腐」を選んで、声の高低、緩急の付け方や「畳み込み」、「歌い調子」といった講談独特の語りの技法を自ら実演してみせた後で、参加者全員で読んでいった。「鉢の木」を読む神田陽子氏の冴えわたる声が響くと、参加者は火がついたように張り扇を叩き出し声を上げ始めた。続いて、貧乏時代の萩生徂徠に情けを掛けた豆腐屋が後に恩返しを受けるという筋の「徂徠豆腐」が読まれた。ここでも、氏は自ら実演して、会話の際の上手下手の使い方を説明するとともに、講談には厳格に決められた語り方はなく、各人が創意工夫を凝らして演じる自由が許されることを述べて、想像力の大切さを説いた。

これらを準備作業として、神田陽子氏の指導の下に武藤が書き下ろした「講談チャタレー夫人の恋人」に移った。その台本執筆に際して氏から受けた指導の中で興味深かったのは、凝った文学的表現は講談にはなじまないという指摘だった。これはシェイクスピア作品のオペラ化に当たって生じる問題に象徴されるように、戯曲と歌劇の関係に似ている⁹⁾。単純化しながら作品のエッセンス——クリフォードの冷たさとメラーズの乱暴な温かさと彼とコニーの交わり——を1200字程度にまとめた「講談チャタレー夫

9) この点については、『英語青年』（2007年7月号）の「海外新潮」（29-30頁）で、トマス・アデスの新作オペラ『テンペスト』を論じた声津かおり氏の興味深い論考がある。



人の恋人」は次の通りである。

講談チャタレー夫人の恋人

武藤浩史

時は一九二一年、所はイギリス、ミッドランズ。戦争で傷を受け下半身不随となった准男爵クリフォード・チャタレーは、跡継ぎが欲しくてたまりません。

「コニーや、わたしはこの麻痺した体じゃ、子どもを作ることができない。お前、どこかでいい男を見つけて、チャタレー家の跡継ぎを生んでくれんかな」

「でも、クリフォード、あなた、それでいいの？」

「いいも悪いもない。愛とか体とかは、はかないもの。精神こそ永遠なのだ。永遠とは何か、この美しい祖国イギリスだ。そして、イギリスを守る上流階級だ。だから、チャタレー家の跡継ぎを作り、それを立派な紳士に育てなくてはならんのだ」

「それ？ それというのは何ですか？」

「それというのは跡継ぎのことだ。跡継ぎは一つの機能に過ぎないから、それと言う」

「ええっ！ 私が自分の腹をいためる子どもがそれなのですか。クリフォード、それはあまりとも言えあまりにも無神経」

ある日、コニーは、凍える屋敷から逃げ出すように、森に行きました。そこには使用人である猟番メラーズが住んでいました。鳥小屋では、キジの卵からヒナが孵ったばかりで、ヒナの元気な鳴き声が聞こえました。

コニーがしゃがんで、キジのヒナを見てみると、メラーズが帰ってきました。

「あい、おめえ、ちょっと触ってみるか」

メラーズは鳥小屋の中に手を入れると一羽のヒナ

を取り出してコニーに手渡しました。生まれたばかりのヒナがコニーの手を勢よくつつきます。

「まあ、なんて元気なのでしょう。どうして、こんなにつつくのでしょうか。私のこと、嫌いなのかしら」

「はははっ。そんなことあねえ。ちょっとヒナの頭を撫でてやろう」

「ピーッ」とヒナが鳴きました。

「ほんとうに可愛いわ。ほんとうに、こんなに小さいのに、こんなにか弱いのに、こんなに生きていて、怖いもの知らずだわ」

と、その時、コニーの手首に一滴の涙が落ちました。女は顔をそむけて、わけもわからず泣いていました。それを見た男の心が炎のように融けました。手を女のひざに置いて、男は静かに言いました。

「泣いてはいけない……さ、家に入ろう」

そして、男の手が、やさしく、やわらかく、女の背の曲線を下りてゆきました。女は小さなハンカチでわけもわからず顔の涙を拭いていました。女は夢見るように、とても静かに横たわりました。こうして、コニーとメラーズは初めて結ばれました。

「おめえ、後悔してねえか」

「え、どうして、後悔するの？」

「おれのような使用人とこうなったからよ」

「いいえ、全然。感謝しているわ……あなたはどうか？ 後悔していないの？」

「ああ、あんたはいい女だ……だが、事が複雑になる。また……始まってしまった」

「え、何が始まったの？」

「人生だ」

運命の恋に出会った二人にはその後さまざまな事件が起こりますが、本日は、チャタレー夫人と恋人メラーズの出会いの一幕、これをもちまして、読み終わりといたします。

「講談チャタレー夫人の恋人」では、振幅の大きい感情表出に適した講談という古典芸の声の力に圧倒された。神田陽子氏の読みは、台本から、クリフォードとコニーのやり取りの不毛な残酷さ、雉のヒナに触れる時のほのぼのとした感じ、狐番の方言の乱暴な温かさ、初めての二人の結びつき、そして、結ばれた後の会話の運命性などを、一瞬にして雰囲気を変えてしまう多彩な声色を駆使して、次々と表

現していった。そして、その後で、神田陽子氏と一緒に、参加者が読んでゆく。彼らは、精妙に構築された言語芸術として傑作小説を丁寧に読んでゆく朗読とは違い、より大雑把なテキストに基づきながら古典芸の声の力で強い表現を行う講談の特徴を実体験することができた。

しかし、この実験授業の文脈において、より興味深いのは、朗読と講談の間に見られる共通点である。神田氏は、狐番の男らしい無骨な生き方に共感して、彼の方言の温かさを見事に描出した。そこには、拙訳の小説『チャタレー夫人の恋人』を読み込んで、狐番の方言に魅了された氏の解釈が反映されていた。また、氏は、各人の想像力と解釈を生かしたさまざまな「講談チャタレー夫人」を演じることが大事だと言い、例えば、鳥小屋のシーンを演じる際には、それがどのくらいの大きさの、どんな形で、どのくらいのヒナがいる小屋なのかをきちんと想像してから表現することが肝要だと述べた。つまり、作品を読み込むことと五感を用いて想像することに基づく解釈が表現に繋がるという基本においては、朗読も講談も同じであることが明らかになった。以上の点から、朗読と講談を二つ並べたことで、その相違点と共通点がはっきり分かるとともに、その共通する基本においては、いずれも視覚偏重の時代に体の五感全体を活性化してリテラシー向上に資することが確認されるという意義があった。

【5日目】

この日は、第1限、第2限ともに、武藤が担当して、創作・書き換えを行った。第1限で創作・書き換えを行い、第2限でその成果を発表する。と言っても、クリエイティブ・ライティングのようにきちんとし



た小説執筆を目指す授業ではない。むしろ、誰にも備わっていないながら日ごろは使われない創造力を「文学する」ことを通して開発すると同時に、創作活動を実体験することで言語テキストに対する洞察を深め、読解力を高めようというのが目的である。だから、第2限目の発表に際しては、単に話を面白がるのではなく、それをどう解釈できるのかという問題を、聞き手と作者の質疑応答を促すことでできるだけ意識させようとした。また、文学の伝統というものが、先行作品を書き換えたり、そこに靈感を得て創作したりすることにより維持されてゆくことを、体感してもらおうと思った。

準備作業として、3日目の第2限終了後に、武藤と横山が協力して作った創作・書き換え用ハンドアウトを配り、それを説明することで、参加者の気持を徐々に5日目の作業に向けさせようと試みた。ハンドアウトの内容は、創作・書き換えのためのヒント集で、具体的な文例とともに、『チャタレー』をめぐる創作・書き換えには、例えば、次のようなやり方があるということを紹介している。

①ジャンルを変える（原作小説を異なるジャンルの作品——講談、落語、劇、コント、ダンスなど——に書き換える。この事例については、先に引用した「講談チャタレー夫人の恋人」を参照のこと）。

②作品中の一節の書き換えから始める（例えば、冒頭を書き換える——「ぼくの時代の真実は***なものなので、ぼくは***な捉え方を拒絶する。〇〇〇が起こった。あたりは△△△となって。……何度☆☆☆が落ちて、ぼくは生きなければならない」）。

③登場人物に焦点を当てる（「がんばれクリフォード」、「ボルトン夫人の手紙」など）。次に引用するのは、横山が書いた「ボルトン夫人の手紙」で、『チャタレー』597頁にある「『有難う！ さあ、それでは、これを！ あなたに上げたいのだけれど』というコニーの言葉に想を得て、別れの時にチャタレー夫人がボルトン夫人に手渡したものが本当は何だったのかを、ボルトン夫人が友人のアニーに手紙で伝えるという設定である。



ボルトン夫人の手紙

横山千晶

親愛なるアニーへ

今日チャタレー夫人が本当に出て行ったわ。いつかはこんな日が来ると思ってたけれど、こんなに突然来るとは思わなかったの、こちらも心の準備ができていなかった。それでも精一杯悲劇の場にふさわしい顔をしていたつもり。チャタレー卿との話はそれはそれは短くて、こっちが期待していたような修羅場もなく、出て行くときはあまりに颯爽としていたので、旅の途中でちょっと戻ってきたといった感じにすら見えた。彼女打ち明けたのよ。出掛けに、いったい自分のいい恋人が誰なのか。いかにもこっちが思っていることを、「思っていたとおりでしょ」と確認したという風情でね。でもね、最後の最後になってふっと近づいてきたので、思わず抱きしめようとしたら、彼女、ちょっと躊躇した。じっとあの青い目で見て「これを！ あなたに上げたいのだけれど——」と取り出したのが古びた小豆色の革の小さな紙入れだったの。渡そうとして手がためらった。「もらってくれるかしら」と私の目を射抜くように覗き込みながら胸の上に軽く押し付けたの。二つ折りをひらくとブルーベルの押し花が足元に落ちて、中を見ると見知らぬ人の写真が入っていた。誰だかわかるまでにちょっと時間があつたわ。それから私は混乱するほど狼狽ききって彼女の目を見た。返そうとしたけれど、胸に張り付いたようで動きも取れなかった。いままで精一杯演じてきた悲劇の目つきが本当の哀しみ変わったのを見て取ったのかしら。彼女の青い目がとろけそうな空の色になって、彼女

は音も立てずに背を向けた。本当に行ってしまった……。

ああ、彼女、本当にこのとききっぱりと、まがうことなくあの人を捨てたのよ。

はじめは若いときのオリヴァーだと思った。でも違った。わかりっこないわ。それが昔のクリフォードだなんて。ちゃんと自分の足で立って、やせていて、所在なさげで、自分の未来を見つめることが怖くて怖くて仕方がないといったその様子。彼女はこの人を愛することができたはずだった。でももう遅い。空は溶けて落ちてしまったのだから。いったい時代はこの人に何をやってしまったんだらう。そう思うと、自然と涙がこぼれた。でもこうしてはいられないでしょう？ 部屋に入ると彼は起こった悲劇が茶番劇だといわんばかりに落ち着き払った様子で椅子に座っていた。堂々として男らしく、どんな艱難辛苦にもものともせず立ち向かおうと膨らみきって嬉々としていた。その男らしさ！ はかなくもろい、明白な男らしさ！ 私は叫びたかったわよ。いったい何があなたをこんな怪物にしてしまったのって。

この文章は、ハンドアウトに載せられていて、横山がその場で朗読した。

④「優しさ」、「森」など、ロレンスの大切なヴェジョンに応答する、散文詩のようなもの（武藤作）。

「優しい静謐」：生はとても優しく、静かで、捕まえることができない。幹を駆けあがるリスのように、石垣の間を滑るように移動するイモリのように、何も言わずに、何の音も立てずに、生は動いてゆく。目も光も追いつかない速さで、動いてゆく。

だが、見ることを止めて、その動きの只中に身を置けば、そして、動きとともに動いて動きと自分を一つにすれば、そこには果てしなく優しい静けさがある。それこそが生。私たちは皆、この静謐の中心によって生かされている。

「森へ入る」：森へ入る。人が立てる音、機械の立てる音が聞こえなくなる。強い風が吹き渡っても、気配が鎮まる。リスが幹を駆け上がり、木々の葉が揺さぶられ、枝と枝の間から青い空が見えて、その大空を鷺が滑空する。ああ、それに比べて、この俺は。木々の根元には、苔と茸と落ちた葉と、マヨネー

ズの蓋。空き地には、ラッパズイセンとブルーベルと、生乾きの狐番の下着。森の中で、思いっきり息を吸ってみな。大きくなれるから。雨が降ってきた。思い切って服を脱いでみろよ。走って、こけて、熱いお茶と一緒に飲もうぜ。

これは、筆者の武藤が朗読した。

⑤人物パターンを尊重し、場所設定を変える：『チャタレー夫人の恋人@セブンイレブン』（例文付）。

⑥何らかの形で『チャタレー夫人の恋人』が鍵となる作品を書く。例として、『チャタレー』の精読によって世界を救うお笑いSF物語「『チャタレー夫人』を読むギンダマン」を、書いてみた。ギンダマンという名は、日吉キャンパスのある東横線日吉駅前の銀色に輝く名物球形オブジェ（通称「ギンダマ」）をもじったもので、この「ギンダマ」の中には「ギンダマン」という男が閉じ込められていて、彼は『チャタレー』を何度も繰り返し読まなければいけない呪いの下にあるという設定で始まる。このような設定にしたのは、参加者全員が慣れ親しんでいる身近な事柄から想像力を羽ばたかせるコツを伝えるためである。

『チャタレー夫人』で世界征服—ギンダマンの優しい叡智
武藤浩史（ちくま文庫『チャタレー夫人の恋人』翻訳者）

日中は人でにぎわっている日吉駅前も深夜となるとひっそりする。皆さん、クラブの練習か何かで遅くなって、午前三時過ぎに日吉の駅を通ることがあったら、銀玉の前で立ち止まり、そっとあなたの耳を銀玉に当ててごらんなさい。雨の降らない静かな夜なら、中からページをめくる音が聞こえるはずだ。

そう、銀玉の中には人がいる。名をギンダマンという。ギンダマンは銀玉の中で座りこんでいて、いつも『チャタレー夫人の恋人』を読んでいる。それが彼の受けた呪いなのだ。かつて、彼が文学実験授業を取った時、彼は朗読する時、間違っただけでなく新潮文庫の『チャタレー夫人』を読んだしまった。教師のムトーは激怒した。「お前は今生で最大の過ちを犯した。おれの一族はトビクローという名の魔術師だ。間違いを犯したことの呪いに、お前を銀玉の中に入れて、おれの訳した『チャタレー』を百万遍読むまで、閉じ込めておこう。そして、出

てきてから、おれの『チャタレー』を暗誦して、一字一句間違えることがなかったら、呪いを解いてやろう」そして、魔術師の目から放たれた赤い光に気を失った男は、目を覚ますと、銀玉の中にいた。外の物音は聞こえるのだけれども、自分の出す声は聞こえない。当初は、ガールフレンドの美由紀が彼を探す必死な声が聞こえた。ひと月たつと、美由紀が新しい彼と楽しそうに話す声が聞こえた。銀玉の中の彼の前には、ただ一つ、ちくま文庫の『チャタレー夫人』が置かれているだけ。

ある時、ムトーが銀玉の中に入ってきて、ギンダマンに恐ろしい秘密を打ち明けた。「俺はこの実験授業で朗読と講談と踊りの共同体を作って、それを軸に慶應義塾を支配し、慶應の創立百五十年を記念して、世界征服に乗り出すつもりなのだ。そして、世界中の人間が、日本語を習得して、ちくま文庫の『チャタレー夫人』を朝から晩まで読むわけだ。はっはっはっはっは」魔術師の前で無力なギンダマンはただ、うなだれて、ムトーの謀略を聞くのみ。

と、次の日に、ギンダマンは夢を見た。夢の中では、濡れた黒髪の美しい女がうるんだ目でギンダマンを見つめながら訴えた。「ギンダマンさん、私はムトーに殺された男の妻フジコです。ムトーはタケフジ製薬という薬品会社を所有しているのですが、ここでは、死ぬまで働くのを止められない恐ろしい覚せい剤のようなものが薬として製造され売られているのです。夫はタケフジ製薬の社員で、ムトーにその麻薬のような薬を無理やり飲まされ、一日十八時間も働かされて、過労死してしまいました。ムトーは、安部シンゾーも小沢イチローも支配下に置いているので、誰も助けてくれません。ギンダマンさん、ムトーを倒せるのはあなただけです。実は、うわさに過ぎないのですが、彼を倒す鍵はちくま文庫の『チャタレー夫人』の中にあると言われています。ギンダマンさん、助けてください、たすけてえ、たすけてえ、たすけてえ……」フジコの声が消えてゆき、ギンダマンは目を覚ました。

さて、銀玉の中はこのようになっている。上から豆電球が吊るされていて、それなりに明るい。読書するには程よい明るさだ。食べ物は、実が成る。モンダーキと呼ばれる遺伝子組み換えバナナの種類で、どんどんジャンクフードの実が成るのだ。春はポテ

トチップ、夏はチーズバーガー、秋になると日清チキンラーメンで、これには生卵がついているので、一番のご馳走だ。冬になると納豆巻きになる。これは厳密にはジャンクフードと言えず、栄養的には一番だが、大阪育ちのギンダマンには納豆が一番辛い。

そして、水。実は、井戸がある。床に羽目板があって、それを外すと、黒々とした穴が開いていて、冷風が吹き上がってくる。これが自然の冷房になっていて、夏は結構涼しい。そこにヒモをつけたコップを下ろすと、五〇メートルほどで底につく。井戸からは、白いヨーグルトドリンクが湧いていて、とても美味しい。精がつくが、それもよしあし。

ある日、ギンダマンは、井戸の底に降りてみようと思った。なぜか井戸に付いている縄梯子をおそるおそる下りてゆき、五〇メートルほど行くと、地面に着いた。ヨーグルトの匂いがふんと鼻をつく。耳をすますとかすかな機械音が聞こえた。そして、闇の中をまさぐると、金属の板に当たった。どうも、ボタンが並んでいるらしい。その中の一つを押すと、「おおんおおん」と人がうなるような音がした後で、また沈黙が戻った。

それから、三分ほど経つと目の前が突然明るくなった。目が眩んだ。エレベーターがあったのだ。ボタンはエレベーターのボタンだったのだ。開いた扉から中に入ると、B 1 から B95 までボタンが並んでいた。それから、それ以外に、よく分からないアルファベットが並んでいる。TKY、NY、LDN、PKN、HY、MT、SM、SFC、LCL。じっと眺めていて、閃いた。そうか、TKY は東京、NY はニューヨーク、LDN はロンドン、PKN は北京。もしかしたら、塾長が海外出張の時に使う、国際エレベーターかも知れない。それでは、HY と MT と SM は何だろう。そうか、SFC とあるから、HY とは日吉で、MT は三田キャンパスか。それで、SM は信濃町の大学病院か。なるほど、ますます、慶應義塾の秘密ルートの匂いがする。慶應はすでにムトーの手中に落ち、塾長はトビクロー一族の傀儡か？ それじゃ、LCL って、何だろう？ LCL、LCL、LCL。都市の名ではない。キャンパスの名でもない。C はもしかして、Chatterley の C か？ はっとした。そうか、LCL とはレディ・チャタレーズ・ラヴァー。トビクロー一族のムトーが世界征服の道具に使う『チャタレー夫人の恋人』

の原書タイトルだ。

たしかに、ムトーはすでに慶應義塾を手中に収めてしまったのかも知れない。そうだとするならば、HYを押し日吉キャンパスに行っても、MTを押し、三田に行っても、意味はない。SFCだって同じこと。よし、それなら、『チャタレー』に可能性を賭けよう。たしかに、『チャタレー』はムトーの世界征服の道具なのかも知れない。しかし、しかし、この小説は、作者D・H・ロレンスが、不治の病に犯されながら必死に、人生で大切なことを伝えようとした、傑作小説だ。そこには、ムトーのような悪いやつには分からない救いの可能性が隠されているかも知れない。

思い切って、ギンダマンは、「LCL」というボタンを押した。「ぶよよん、ぶよよん、ぶよよん」とエレベーターは奇妙な音を立てて下り始めた。B 95まで下りると、横揺れを始めて、しばらくガタガタと震えていたが、その後で急に洗濯機が回るように回転運動をし出した。ギンダマンは頭がクラクラし、しばらくすると気を失った。何分経ったのかはよく分からない。気がつくと、エレベーターは止まっていた、扉は開いていた。扉の向こうには、斜めに差し込む日のひかり。鳥がさえずり、カラマツの林が見えた。エレベーターはかつてロビン・フッドが住み、今では猟番メラーズの住むイギリスはシャードウッドの森に繋がっていたのだ。「LCL」の目的地とは、『チャタレー夫人』の舞台である、コニーとメラーズが結ばれるあの森の大自然だったのだ。かすかに水音が聞こえる。あれは、実験授業で朗読した「ジョンの泉」だ。そこから、しばらく歩くと、秘密の空き地に秘密の小屋があって、小屋の中では、メラーズが一心不乱に日本語を勉強していた。ちくま文庫の『チャタレー夫人の恋人』を読むためだ。メラーズは、トミー・デュークスに、「今魔術師ムトーに征服されつつあるこの世界を救うためにはちくま文庫の『チャタレー夫人の恋人』を読まなければいけない」と言われて、大急ぎで日本語を勉強し始めたのだが、なにせ漢字が難しい。題名も『チャタレーおっとびとのへんじん』と読む始末で、とてもとても全文を読むには時間が足りないと、頭を抱え込んでいたところにギンダマンが現れて、「地獄に仏」と歓喜した。「なあ、ギンダマンさん、『チャタレー』の中にある

秘密とはなんだろうか。おれは、ちくま文庫二四七頁に書かれている、『男は口への接吻をとて嫌っていた』という一節がとても気になっているのだ。なぜってね、俺は本当は女の口にキスをするのがとても好きなのだ。おれのことを書いたロレンスさんはどうしてこんなことを書いたのだろうか。日本人の君に何か分かることはないのかい。ここに、ムトーをやっつける鍵が隠されているんじゃないかという予感がするのだが」

それを聞いたギンダマンがはっとした。

「日本人と口か？ ひょっとしてあれかも知れない」
ギンダマンはメラーズに訊いた。

「メラーズさん、ムトーの栄養源はなんだい？ あいつは、人間の食べ物を食べて生きているのかい？」
「ああ、ギンダマンさん、それがムトーの最大の謎なのだ。どうも、人間の食べ物だが、イギリス人には食べられない食べ物を食べて生きているらしい。だが、その食べ物が何なのか、イギリス人の俺には分からない。とてもとても酸っぱい食べ物らしい。口に入れると、顔がキューツとしばむような、妙ちきりんな食べ物らしい」

「なるほど、やはり、もしかして、もしかして、あれかも知れない。なあ、メラーズさん、日本には梅干というとても酸っぱい食べ物があって、とても栄養があるのだ。もしかして、ムトーの栄養源とは……。ああ、そうか、もしかして、『チャタレー』の中のメラーズさんが現実のメラーズさんと違って口へのキスを嫌うのは、ムトーの気持ちを反映しているのかも知れない。作者のロレンスはそのことを知っていて、ムトーの謎をそこに書き込んだのかもしれない。そうだ、きっとそうだ、ムトーの栄養源は梅干なのだ。ムトーはいつも梅干を食べていないと魔術を使えない。だから、いつも、口のあたりが、酸っぱい、酸っぱい気持ちだから、とても口にキスをするところじゃない。そうか、それならば、この世界から梅干をなくせば、ムトーを退治することができるのだ」

「さすが、ギンダマンさんだ。ちくま文庫を隅から隅まで読んだ日本人じゃなければこの秘密は分からない。ムトーがあなたを銀玉に閉じこめて『チャタレー』を読ませたことが、ムトーにとってはあだとなったわけだ。おろかな魔術師だ。『チャタレー』を

利用して朗読と講談と踊りの共同体を作ろうというのは、それが人びとのためにするのなら素晴らしいことだが、世界征服に利用しようとするとは。麻原ショウコーにも劣らぬ邪悪なやつだ」

その後、ギンダマンは、マムシ谷の防空壕に幽閉されているアンザイ塾長を救い出し、三田会を通じて日本中の梅干を買占めさせ、ムトーの息の根を絶つ。ムトーもこの敗北を通じて、慶應義塾の底力に気づき、論吉像の前で土下座する。懐の広い慶應義塾はムトーを許し、翌年からムトーは慶應大学で働くようになる。そう、今、日吉で『チャタレー夫人の恋人』を教えている武藤は魔術師ムトーが改悛した姿なのである。本人がそう言うのだから、これはうそ偽りのない本当のお話。

⑦「勝手にロレンス」詩。これは、筆者とロレンスの出会いを書いた自由詩である。他の参加者にも、ロレンスや『チャタレー』絡みで詩作を試みる事が奨励された。

そして、もちろん、『チャタレー夫人の恋人』に関するものであるならば、その他のやり方で創作や書き換えを行ってもよしとした。

以上の引用文例は、すべてはほぼ即興的に作った文章なので、その文学的レベルについて云々するのはご遠慮願いたいですが、これまでも「文学」の授業で学生たちにこの種の創作を試みさせたことがあり、その際にちょっとしたヒントを与えるとそれが契機となって学生の中に潜在する物語作成力が俄かに動き出すのを経験していたので、今回も、以上のようなヒント集を用意して、創作体験のない大半の参加者たちの物語脳を目覚めさせることを試みた。近年は、文学のみならず、他のさまざまな領域——歴史、医学、精神医学、脳科学、臨床心理学、社会学、言語学など——で物語の機能が注目されており、たしかに夢を見ない者はいないことから人間の物語作成力の創造性・普遍性は疑うべくもなく、教師としての経験からも、日ごろ創作文の経験のない学生でも、きっかけを与えさえすれば、物語脳が活性化するのは分かっていた。このような文例を見せながら、その一部は読んで聞かせながら、自分の中の物語力を解放させて、設定を考えたり、その中の人物を動かしたり、テーマを意識したり、時折文学的比

喩を挿入したりするように指導した。真面目な作品を作っても遊んでも構わないので、創作・書き換えについて考えておき、できることならば、前もって文章を書いてくることを奨励した。このような活動を体験することで、学生たちの創造力全体が磨かれ、広く他領域で独創的な仕事をする事に結びつくであろう。

さて、この作戦が当たったのか、5日目の授業の最初から学生たちは張り切っていた。第1限を創作・書き換えの作業時間とし、第2限はでき上がった作品の発表に当てることにした。どのような形で創作・書き換えを行うかは各参加者の自主性に任せたので、グループを作って用意してきた文章を見せ合ってコメントし合う者あり、考えてきたアイデアを基に一人で執筆に没頭する者あり。筆者（武藤）とアシスト役の横山と佐藤（元）は全体を見て回って適宜指導しながら、主として、準備をしないでやってきた学生への個人指導に当たった。第2限目は、大いに盛り上がる創作発表の場となった。発表タイトルを列挙しよう。「クリフォードの憂鬱」、「森の音」、「ラグビー館の崩壊」、「森と女」、「クリフォードの手記—10年後・30年後」、「がんばれクリフォード」、「『チャタレー夫人』と『アレ』」、「くりかえし」、「カンパセーションピース」、「幕末好色女 お紺と利助 増上寺の出会い〜芝浜の絶頂」、「チャタレー夫人 @日吉キャンパス」、「チャタレー夫人の子ども @x大学—しょせんそんなもの…と思っていたら」、「ラグビー邸での歓談中に」。ここからも推測できるように、濃密な叙情を湛えるものあり、しんみりさせるものあり、大笑いする作品あり、多彩な力作が揃った。すでに2日目から4日目にかけて、身体ワークショップを経、朗読や講談の訓練を受けてきているので、声に出して他人に伝える表現力は身に付いている。とりわけ、『チャタレー』の出会いの舞台を幕末の江戸に移し、原作小説から表現を借用しながら講談に仕立て上げた「幕末好色女」、コニーとメラーズのその後を描いた散文詩かと思いきや、いきなり講談調に転じて聞き手を抱腹絶倒させる「くりかえし」、村上龍ばりの濃密な文体で描かれる「クリフォードの憂鬱」、『チャタレー』冒頭の書き換えで、「アレ」、「ソレ」、「コレ」という指示代名詞を散りばめ、抽象的かつ意味ありげな生々しさを醸

成した『チャタレー夫人』と『アレ』などが、強い印象を残した。登場人物としては、意外なほどクリフォードが人前で、小説の表面的な流れに反して読む遊び心が参加者の間で見られたのは、洗練された読みの力を示唆して喜ばしい。ロレンスばりの辛らつな風刺作品もあった。時間の許す限り、質疑応答をして、参加者の作品解釈力を刺激することも試みた。その結果、作中ユーモラスに言及される祖父・祖母像の中に実は前年に他界した祖父の思い出が秘められていることが分かりしみりしたりもした。総じて、このような活動が、創造力を刺激し、言語力全般を高めるのは、疑いない（学生の発案で、創作文集が作られた。参考資料中の「創作文集」(36-37頁)にその表紙、序、創作例がある）。

【最終日】

第1限の黒沢氏の授業については既に述べた。最終日の流れという観点からひとことだけ付け加えれば、第2限の発表会への導入として、踊りという身体的作業が効果的だったと思われる。

そして、第2限は、各参加者に二種類の発表をもらった。一つは『チャタレー夫人の恋人』からの朗読で、彼らはさまざまな箇所を選んできて、気持ちの入った見事な朗読を披露した。もう一つは、講談あるいは自作作品の発表である。講談の古典「鉢の木」と「徂徠豆腐」を熱演した者が一人ずついた。前日作った創作講談を読んだ者が二人いた。それ以外の学生は自作作品を発表した。再度、講談師の神田陽子氏にご参加いただきコメントをお願いする



とともに、放送表現教育センター講師の田村操氏に来ていただいて朗読に関する評語を賜った。学生も、講師も、大いに笑い、大いに感動した。朗読、創作ともに、これだけの短期間で著しい上達を示す学生に驚いたというのが講師陣の一致した感想である。やはり、作品解釈を基礎に置いて、身体ワークショップ、朗読・講談、創作・書き換えを行うという総合的なアプローチを取ったことが功を奏したのではないと思われる。

無記名の授業アンケートは14名から回答を得た。すべての評価は肯定的だった。AからDの間で評価して欲しいという要望を出したが、付けられた評点はすべてAで、中には丁寧にA+++としてくる者もいた。以下、その抜粋を紹介すると、「頭も身体も使いまくりのいい授業」、「いずれの内容も、頭の特長な働きや、精神と体の連関が感じられるもので、とても充実していたし、『チャタレー』読解にもつながった」、「身体と頭と心をフルに使った一週間でした。全てのバランスが取れていたことが良かったのだと思います。あらためて『チャタレー夫人』にふれましたが、真剣に読みこむ中で、(ありきたりな言い方ですが……) 生きることのヒントになりえたように思います」、「文学の解釈としてこういう形があって良いと思います」、「文学を体で感じるという経験は貴重なものです。漠然と文学を読み流している今までの読み方はもったいないのだと気づかされました。ダンスをはじめ何のこともやら理解できなくて一人とり残された気分になりましたが、説明されてなる程と芸術の深さを思いました」、「いままでない文学の捉え方を体験することができて、貴重な体験をさせていただいたと思うのと同時に、たく



さんのことを学ぶことができた実感しております。……集中的に授業を行っていただいたことも、とてもよかったです。これによって、前日に学んだことを次の日に生かすことができ、最後の創作と発表につなぐことができたのではないかと考えております」、「普段、ただ生活しているだけでは感じられない『感覚』(様々な何か)を感じられたというのは不思議で、大変貴重な体験だったと思う。大学らしい『考える』、そして『自分なりの』答えを見つけるという過程が非常に多く取り入れられていた」、「いろいろな人の創作や朗読を通してその人の前意識が出てくるポイントポイントがあるのがわかり、それによって読み方がいろいろに違うのだなと感じた。そして、ただ感じるだけでなく、その人の読みの解釈に自分自身も入っていった。それはやはりお互いに与えあったインスピレーションと、共通言語としてのダンス(身体知)と読み(頭脳知)が共有されていたからだと思う」

あまり自画自賛的な筆致にならないように心しなければいけないが、参加者の反応は、率直に言えば、熱狂的、控え目に言っても、強く肯定的であった。ぜひこの試みを続けて欲しいという要望も多く、励ましを得た。やはり、学生の貴重なポテンシャルを引き出すためには、頭と体の両方に働きかけて、その二つを有機的に結びつける教育が必要とされている。

もちろん、反省点はある。じっくりやるには時間が足りなかった。授業間の相互関連については、参加者からも肯定的な感想をもらったものの、それぞ

れのアクティビティを授業後も長く影響を残すぐらいにじっくりこなすには、実際に与えられた時間の倍ぐらい必要ではないだろうか。5日目と最終日は、大いに盛り上がり創造性・自発性を発揮した楽しさという点では文句なかったが、創作された作品について質疑応答をする時間が十分になく、創ってからもう一度それを解釈し合う作業をもっとやりたかった。また、最終日の授業後に聞いた限りでは、身体的活動を通じて、参加者たちの間に強い絆が生まれ、コミュニティ的な一体感を体験したことが、参加者にとって、強い魅力だったようだが、楽しい身体的一体感だけでは、カルチャー・センターと大して変わらないし、ある種のカルトとも繋がってしまう。大学でのコミュニティは知的共同体アカデミック・コミュニティでなく、アカデミック・コミュニティではいけない。授業終了後に送った次のようなメール(8月13日)で、その危険性を指摘し、歴史的思考を促した。

皆さま

武藤です。一週間お付き合いいただき、有難うございました。私自身、とても楽しく学ぶことの多い日々でした。皆さんのコメントからも、終了後いただいた講師の先生方の熱いメールからも、実り多い何事かが本当に起こって、その素晴らしい時間を皆で共有できたことが確認できました。(中略)

さて、皆さんと話していて、「身体・五感が解放・開放された。また、解放・開放されたことにより人との繋がりが実感された」という意見を多く聞きました。私自身も昨日帰途に着く際に、一週間前よりも感覚が鋭敏になって、世界が生々しく感じられ、かつ皆さんたちとの絆ばかりか、世界との一体感を得ている自分を発見しました。とても貴重な体験でした。

しかし、ここで、単に「ああ、素晴らしかった!」で済ますのではなく、今一度、体の問題から頭の問題に移りたいと思います。そして、初日のセッションで申し上げた身体の危険性について立ち戻るならば、われわれが知ったこの種の体験は、おそらくヨーガ系の修行を通してオウム真理教の信者たちが持った経験ともある程度の共通性を有するものではないかと思っています。ですから、この種の体験が単純な世界観に結びつかないように注意することが肝心です。むしろ、この体験を、文学や芸術や歴史のさ

らなる勉強を通して育まれる強靱な知性によって支えていかなければいけないと考えています。体が開かれていけばいくほど、生の欲びが増すとともに危険も増して、頭の強靱さ、柔軟さが必要になるのです。ですから、皆さん、これまで以上に勉強に精進し、知性と身体性を結びつける努力を怠らないでください。「道具的理性」からの脱却は「理性」を捨てることではなく、「理性」を磨いてそれを「身体性」に繋げることで可能になります。皆さんが、この経験を「ディープな身体性に基づく寛容で自由な人生と社会」の方向に活用していただくことを切に願っています。

すでに繰り返し示唆されているように、ここで言う身体知とは、「現代思想」的な解釈方法を身体体験に繋げて、身体経験についての読みの可能性（小説読解）と身体経験としての読みの可能性（朗読・講談）と読むことをそれ以外の身体経験に繋げていけるような可能性（身体ワークショップ）を結合させ、そこに、さらに、創作・書き換えを加えて創造的な積極参加の要素を付加して、心身の相互啓発的な育成をすることから生まれる類の統合的知性である。科学的に考えても、繰り返しになるが、人間の思考は「身体化され、ほとんどがイマジナティブでメタファー的〔文学的〕であり、大幅に無意識でありそして感情的なものが参加している」（『肉中の哲学』、602頁）のだから、この種の身体知の授業は、総合的な思考力の育成に繋がってゆく。解放された身体知の重要性を意識した文学教育は、感性を発達させ、独創性を発達させ、コミュニケーション力を発達させ、現代日本社会に最も必要とされる生き生きとした身体に支えられた独創的知性を生み出す最上の手段の一つと言うことができるだろう。

4 結 び

最後に、この種の授業が他の作家や芸術家の作品についても可能かどうかという問題を考えて、本論文の結びとしよう。確かに、ロレンスという作家が身体的経験を思考し描出する点において稀有の天才であるのは間違いないし、他の作家や芸術家の作品についてはやってみないと分からないという不確定の部分があるのは否めない。しかし、すべての作品

について応用可能というわけではないが、他の作品でも同様のことはできるだろうというのが、筆者たち（武藤、横山）の考えである。総合的なアプローチを誘い、また許す器の大きい作品を選んで、朗読、身体ワークショップ、創作・書き換えを組み合わせ、それを「現代思想」的な作品読解に繋げてみればよい。その際、朗読や創作・書き換えは多くの作品で共通して可能であろうが、おそらく、扱う作品によって、身体ワークショップの部分が大きく変わってくるだろう。例えば、ジョージ・オーウェルの『動物農場』を選んで、身体ワークショップは合唱とし、それと連関させて、創作・書き換えの作業の中に作詞や作曲を含めてみては如何だろうか。一緒に歌う力の可能性と危険性を示す例は歴史上たくさんあるのだから、それを体感し、歴史知を身体化することができるだろう。

当実験授業の教員参加者には、ウィリアム・モリス研究者（横山千晶）とヴァージニア・ウルフ研究者（佐藤元状）がいたが、ロレンス以外の作家・作品を用いてこの種の授業を実施する可能性については、共に肯定的な意見だった。

たとえばウィリアム・モリスの社会主義ロマンス『ジョン・ボールの夢』（1888年）と『ユートピアだより』（1891年）では、ストーリー・テリングや謡、バラッド、演説、吟遊詩による戦の状況報告など、今の私たちがすでに忘れてしまったものを含め、さまざまな表現法が随所に散りばめられる。社会主義者のウィリアム・モリスが信じた仲間との連帯は、飲食をともにし、共に唄うことで確認される。ここでもこの新たな表現による共同体の組織が、ひとつの政治運動へと繋がる可能性と危険性を学生は体感することだろう。またバラッドによる呼びかけ表現やメタファーを駆使した韻文による状況説明などを学生自身が作詞・作詩して、唄う・詠う身体ワークショップを行えば歴史を実感する文学教育ができるだろう。ありがたいことに慶應義塾大学の日吉キャンパスは自然に恵まれている。この地形を生かしながら、戸外でバラッドを使って遠方の人々に合図を送ったり、共に唄うことができるだろうし、中世のカリスマ演説者であるジョン・ボールに成り代わって大勢の前で戸外演説を行うこともできるだろう。しらせ文化に慣れきった若者たちが、一言一言に心

動かされる観客となることで、モリスが夢見た仲間との連帯の片鱗や、発せられることによって思っても見ないエモーションを生み出すことばの力、そして同時にことばに容易に動かされる人間の脆弱さをも体感することになるのではないか。また、モリスの戦の描写は、百年戦争でのある実戦をモデルとしており、モリスの歴史研究の成果が如実に現れている部分である。黒澤明監督の『七人の侍』をも思わせる戦略会議や布陣の張り方の描写は、「地形」そのものの研究と深く繋がっている。ここでは慶應義塾大学日吉キャンパスに残る「日吉の森」を大いに利用したい。そうすることで、私たちがそこで生活している土地の歴史とユニークな地形についても同時に学習できるだろう。この点に関しては、地学の教員の協力を得ることで、より内容の濃いものとなるだろう。また、シミュレーション・ゲームや、ロール・プレイなどに普段から慣れ親しんでいる学生だからこそ、この地形を生かした戦略会議を実際に開かせてみても面白い（2008年度夏にはウィリアム・モリス『ジョン・ボールの夢』を教材に用いた文学実験を行い、大きな成功をおさめた。その報告書は現在作成中である）。

ウルフの場合はどうだろうか。登場人物がロンドンを散策する名作小説『ダロウェイ夫人』（1925年）が使えるのではないかという提案がされた。その場合、身体ワークショップは町歩きだろうか。ただ漫然と歩くのではなく、そのときの空気や音、あるいは日の光に敏感になり、感覚を鋭敏にして身の回りを感じ取り、経験し、そこから新たな表現方法を生み出すことができるだろう。おそらくその経験は、参加者に思ってもみない自己との対峙をもたらすのではないか。五感を研ぎ澄ますことで、空気のおいから、過去の思い出がよみがえったり、自分の中に沸き起こってくる不思議な感情に気がつくことだろう。参加者ははじめのうちは見知らぬ自分と対峙することで、大いに戸惑いを感じるかもしれない。このような過程を経て、知らず知らずのうちに「意識の流れ」を経験することになるのではないか。これは、新しい自分・新しい知覚との出会いとなる。次はそれをどのように言語化するか、他人に伝えるか、という問題になってくる。

もちろん、イギリス文学には、シェイクスピアと

いう大物がいて、時を超えて私たちのものの捉え方にも影響を与えている。しかしこのシェイクスピアこそ、詩であり、歌であり、歴史であり、身体を通した叙述であるので、演劇で身体ワークショップをすることで文化そのものを体感することになる。それ以外の国でも、また、文学テキストに限定せず、先に出た合唱も絡めて考えれば、ベートーヴェンの第九交響曲『合唱付き』を用いて、文学（詩）と音楽にまたがった授業を展開し、一般には進歩的な共和主義者としてのみ名高いベートーヴェンと彼の芸術の史的的位置を、1814年のウィーン会議に集まる施政者に阿った駄作とされる合唱曲『栄光の瞬間』のような作品をも『第九』との関連から考え合わせて追求すれば、芸術の意味、合唱という身体活動の意味、それらに繋がる歴史の意味を、より豊かに多義的に学ぶことができるだろう。

美術の分野でも歴史と身体を前面に押し出したアーティストたちが活躍している。スタティックな絵画を、それを見る者が経験する時間を伴う情動として捉えなおしたビデオ・アーティスト、ビル・ヴィオラ、絵画が生み出される過程を時間をかけて追体験することから、作品のみならず歴史的な背景や画家の感情にまで入り込んでいこうとする森村泰昌、写真と言語のコラボレーションにより、過去・現在・未来を鳥瞰する物語を編み出すやなぎみわの試みなどは、教育現場でも応用できるヒントに満ち満ちている。

ここで挙げたアイデアはほんのわずかな例に過ぎない。さまざまなカリキュラムが可能なはずだ。教育関係者は各自考えていただき、それぞれの授業に応用してみたいかがだろうか。

このような試みを単なる「遊び」と片付ける向きもあるかもしれない。しかしロジェ・カイヨワの『遊びと人間』を待たずとも、遊びはすべて、現実の模倣であり、現実への準備段階である。その意味で、現在の私たちの遊びが視覚的なものだけに限られてしまっていることが、私たちの思考を狭隘なものにしている、いや現実の中で私たちがサヴァイヴァル不能にしまっているということに、注視すべきなのだ。

最終的に、この種の授業で可能になるのは文学体験・芸術体験の深化であり、これを通常授業でも鍛

えうる「現代思想」的解釈力と合体させることで、総合的思考力の陶冶に向けて不可欠な第一歩が印される。そして、心身の合一が体験され、生きるヒントが与えられるとともに、体験と解釈力が結合される時に、歴史観の身体化が、歴史とは心であり体であるという小林秀雄的洞察に向かう道が準備される。テリー・イーグルトンによれば、マルクスもフロイトも身体の思索者であった。心の秘密を探る精神分析の観点と弱者の立場から近代の歴史を考える社会福祉主義的観点を活用する「現代思想」の解釈力、すなわち、心と弱者と歴史への洞察を基軸に展開される「現代思想」の試みと力を、身体的経験と合体させて、成熟した歴史観を授業で学生の体の中に育み、同時に身体知の力に支えられた実行力を育成することが、私たちの試みの究極の目的であると言える¹⁰⁾。

〈主要参考文献〉

大津雄一、金井景子編著『声の力と国語教育』（早稲田大学教育総合研究所、2007年）
 川島隆太、安達忠夫『脳と音読』（講談社、2004年）
 ミッシェル・セール『五感—混合体の哲学』（法政大学出版局、1991年）
 武藤浩史「『チャタレー夫人の恋人』の過去・現在・未来—もう一つの(ほぼ)50周年」(『英語青年』2007年9月号、322-325頁)
 武藤浩史、横山千晶「身体知と新しい文学教育①」(『教養論叢』128号、2008年2月、1-51頁)
 ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン『肉中の哲学—肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』(哲学書房、2004年)
 鷺田清一、野村雅一編『表象としての身体』(大修館書店、2005年)

10) 同時に教養教育の枠内で、身体を通して自己と向き合い、自分の身体を媒体として、文学・文化および歴史教育を捉えなおすことは、国内はもとより、海外においても先進的な試みであることも特筆しておきたい。これは本論文の筆者がここ三年間、高等教育における導入教育、初年次教育、そして教養教育に関する国内外の学会やセミナーに出席して、実感するものである。またこのような授業の構築は、(教育者としてそのメソッドを、そして研究者としてその研究対象をより深く洞察するという意味での)ファカルティ・デヴェロップメントに繋がるであろう。また言い古されたことばではあるが、「学問の領域を超えて」教育者が身体を介して学生、あるいはほかの教育者と繋がるという点でも、教える側にとってまったく新しい試み、そして挑戦となるだろう。

鷺田清一『感覚の幽い風景』(紀伊國屋書店、2006年)

〈謝辞〉

素晴らしい授業をしていただいた各講師(佐藤仁美氏、黒沢美香氏、濱野久美氏、岡撰子氏、神田陽子氏)に深甚なる謝意を表するとともに、余人をもって代えがたいサポート役を務めていただいた同僚の佐藤元状氏にも心から御礼の言葉を申し上げたい。

また、本報告書は、慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』所収の拙論「身体知と新しい文学教育①」を改訂・加筆したものである。お世話になった同研究会にも謝意を表したいと思う。

参考資料

授業アンケート

1 全体評価

学生	評価	コメント
a	A+	いろいろな人の創作や朗読を通して、その人の前意識が出てくるポイントポイントがあるのがわかり、それによって読み方がいろいろに違うのだと感じた。そして、ただ感じるだけでなく、その人の読みの解釈に自分自身も入っていった。それはやはりお互いに与えあったインスピレーションと共通言語としてのダンス(身体知)と読み(頭脳知)が共有されていたからだと思う。／授業化については、やはり集中化したほうがよいと思う。前日やったことのつながりを意識してやることと、お互いのきずなを短期間に深めるために。
b	A	身体と頭と心フルに使った一週間でした。全てのバランスが取れていたことが良かったのだと思います。あらためて『チャタレー夫人』にふれましたが、真剣に読みこむ中で、(ありきたりな言い方ですが…)生きることのヒントになりえたように思います。特に、パフォーマンスのワークショップを多く受けたことで、自分の中で「パフォーマンスしなければ意味がない」と考える傾向に気づきました。ひょっとすると、今後の人生を変えかねないな…と感じています。とくに、これからも受けていきたいと思うレクチャーも多かったです。／個人的には、このスタイルで継続するとよいと考えています。無償の自主的参加がクオリティにつながったのでは?と思います。
c	A	この授業に参加させていただきまして、いままでにない文学の捉え方を体験することができて、貴重な体験をさせていただいたと思うのと同時に、たくさんのことを学ぶことができた実感しております。また、夏休みというチャンスを利用し、集中的に授業を行っていただいたことも、とても良かったと思います。これによって、前日に学んだことを次の日に生かすことができ、最後の創作と発表にもつなぐことができたのではないかと考えております。／授業を正規化することに関しては、やるだけの価値があると見ていますし、やはり夏休みを利用する形で行っていただいて、単位を出してもいいのではないかと思います。
d	A	ヴォイストレーニング、朗読、はじめての経験にサプライズで、講談は目の前にテレビの中の講談師が飛び出してはなしをして下さっているという事実が、夢を見ている気分でした。文学を体で感じるという経験は貴重なものです。漠然と文学を読み流している今までの読み方はもったいないのだと気づかされました。ダンスは、はじめ何のことやら理解できなくて一人とり残された気分になりましたが、説明されてる程と芸術の奥の深さを思いました。感謝しております。
e		文学の解釈としてこういう形があってよいと思います。 非常に面白い授業で、僕のやっている演劇にも役立つものでした。ありがとうございます。／正規の授業にも是非して頂きたいと思います。ただ、正規授業にする際には、「おれの『チャタレー』」や発表会のように、個々の解釈が見えるもの、朗読を中心とすると良いと思います。少人数制も崩さない方がよいと思います。きっと文章に対する興味が深まると思います。
f		帰宅途中の電車で寝てしまうほどに、頭も身体も使いまくりのいい授業だった。 授業の正規化に関しては、通常講義よりも集中講義で行った方がよいだろう。学部どころか年齢の枠をも超えた授業展開が可能なのは、長期休暇の時期しかない。また、全員が一丸となって課題に取り組む姿勢も形成しやすいように思った。日がたつにつれ、全体の親密度と身体自由度が、ぐんぐん上昇していくのが見て取れた。楽しかった。
g	A-	授業として正規のものにするのはとても良い考えです(ついでに単位も)。いずれの内容も頭の特種な働きや、精神と体の連関を感じられるもので、とても充実していたし、チャタレー読解にもつながった。ただ、進行をもう少しスムーズにできれば、尚良いと思います。
h	A+	普段、ただ生活しているだけでは感じられない「感覚」(様々な何か)を感じられたというのは不思議で、たいへん貴重な体験だったと思う。大学らしい「考える」、そして「自分なりの」答えを見つけるといった過程が非常に多く取り入れられていたので、今後も何らかの形で(通常講義でも何でも)続けていけたら良いと思います。素晴らしい財産を与えていただくことができて、(講義だけでなく、参加した全ての人からも)、本当に感謝したいです。
i	A	文学を体感するという主旨の面白さ、ワークショップとして程度(適度?)な人数、参加した学生・講師の多彩な顔ぶれ、このような場に参加できて幸運でした。他では体験できないこのような場を、これからも作っていただければ嬉しいです。夏休みに開かれて、外部の者にも参加しやすかったことがよかったですね。
j		横山先生に呼んでいただいて、本日のみの急な参加でしたが、とても興味深く参加させていただきました。こうした試みは、ぜひ今後も続けていかれてほしいと思います。次回、チャンスがあれば、初回から通して参加、体験してみたいです。

k		とても興味深い内容です。／ぜひとも正規で。もう少しコンパクトにできると。
l	A++	今まで、自己表現・自己解放は、芝居の仲間とするのが主だった。しかし、やる気と、それができる空間というありがたい環境のおかげで、素の自分で解放がたのしめだし、素の方々の表現にふれることができ、いつも以上に素直な気持ちで味わい、表現することができた。授業で味わった、未知なるものへの挑戦する力、先生方の助言でそれが大きくかわってゆくよるこびは、「日常に直結するもの」として後々かみしめられる部分も多いと思う。なにしろ、「変人」の集いであることがとてもうれしかったし、このチャンスにたいへん感謝したいと思う。／このようなチャンスは是非、たくさんの方々に与えられるべきだと思う。表現したくてもやり方をしらない人たちがたくさんいると思います。一般講座として開講されることを願います。
m	A+	これからもぜひ全学生に広げてやって行ってほしい。夏にやるのはより思い出深いと思います。

2 個別評価

○ 8月6日1限 武藤 イントロ・趣旨説明

e	B	
f		初日なので全員が構えたところ、固いところがあった。“知”の日だ。
g	○	
h		文学の授業で扱う内容以外の内容がさらに多いと良かったと思う。
k		わかりやすい
l	A	文学の授業に出ていなかったが、よく分かった。
m	A	若者の感じ方を知ることができ、勉強になった、

○ 8月6日2限 武藤 おれの『チャタレー』

c	A	他の人の考えを聞くことができ、勉強になったと思います。
e	A+	他の方の文章に対する解釈がよく分かりました。
f	B+	(1限と同じ)
g	△	
h		映画などの変った視点で作品が見られて面白かった。
k		なくてもいいかな
l	A+	何でも感じたことを言いあえる空間と、先生のコメントによって、自由に感じる事ができた。
m	A	若者の感じ方を知ることができ、勉強になった、

○ 8月7日1限 佐藤 触れるワークショップ

a		もっと触れたかった！
c	A	触れあう、という忘れられがちなところから入って、とても良かったです。
e	B	
f	B	目力。
h		これが一番、普段できないことのように思えた。
k		すばらしいウォーミングアップ
l	A	今だかつてない経験ができた。全員と触れ合いたかった。
m	A+	「身体で感じる文学」というテーマと「チャタレー」がピッタリと合致したクラスだった。
n	A	触れるという行為がこれほどに心理的距離感を縮めるのだということに改めて気づかされました。

○ 8月7日2限 黒沢 ダンス

a		たっぷり汗をかいた。なにげない表現なのに新鮮だった。
c	A	ただ感心しました。身体の動きで文学を体験した、という気分になりました。
e	B-	
f	C	この段階では、まだよくわかっていない。
h		はじめはかなり困惑したところもあったが、気がつくと面白く、楽しくなっていた。中毒性があった。
k		楽しい
l	A+	いわゆる「ダンス」というものとは違う世界を感じられた。新しい身体表現だった。
m	A+	動きの一つ一つに理由があり、意味があることに気づかされた。身体が笑った。
n	A	音楽やリズムさえ、そぎ落とされ(た)ダンスの究極に触れることが出来ました。自分を意識することの難しさも知りました。

○ 8月8日1限 濱野 ヴォイス・トレーニング

b		自分の活動にとっても大事なものがあって、続けたいです。
c	A	ゴスペルという今まで親しまなかった音楽をわかることができ、とてもよかったです。
e	B-	
f	B	だいぶうちとけていたが、恥が残っていた。
h		ゴスペルと自分の解放というのがリンクして、妙な楽しさがあった。
k		ゴスペルも歌いたい
l	A	トレーニングというより、自分をいかに解放するかをまなべてよかった。
m	A-	声で感性をときはなつ気持ちよさを味わえた。
n	A	解放されていない自分を知りました。声とリズムはトランス状態を生むことを再確認しました。

○ 8月8日2限 岡 朗読(1)

a		とても勉強になった。自分の声ですこしだけ好きになった。
c	A	声を出して、それで表現する、ということで本当にこの授業を通してわかったことがたくさんあるとおもいます。
d		美しい日本語。ことばの重みを感じる。
e	A	自分の読み方のクセがよくわかりました。
f	B	全体的なタイムテーブルの回し方がすこし気になった。全員の声を録音できるの方がよかった。
h		「音読」と「朗読」の違いが本当によく分かった気がする。じつは様々な頭をフル回転させる難しいものだったのだと感じたが、興味をもった。
k		1回でも十分かも
l	A	先生の細かい指摘で上達するのがよく分かった。もっとさまざまなジャンルのものを読んでみたいと思った(詩など)。好きな部分を読みあうのもいいと思った。
m	A	むずかしいと感じたが、奥が深く興味深かった。
n	A	言葉の大切さを知りました。語感もまた。痛感したのは、表現において生活状態や人間性が投射されること。自分の人生をふりかえらざるをえなくなり、すこし悲しくなりました。

○ 8月9日1限 岡 朗読(2)

b		朗読の奥の深さに、続けたいなと感じました。
c	A	
d		アクセントが自信ないので辞典を買う必要あり。
f	B+	(朗読(1)と同じ)
h		(朗読(1)と同じ)
i		良コメント、良アドバイス
k		(朗読(1)と同じ)
l	A	(朗読(1)と同じ)
m	A	(朗読(1)と同じ)
n	A	(朗読(1)と同じ)

○ 8月9日2限 神田 講談

a		テンポが速い。2時間あってもいいかも。
b		講談は気持ちいい！ということが大きな収穫
c	A	ただただすごいです。自分でやってみて面白いと感じたものもあります。
f	A	感覚。打つ！ うなる！ 話す！ 楽しい！
h		朗読とはガラッと変わった迫力があって。面白かったとしか言えない。
i		エネルギー
k		楽しい
l	A+	全く新しい世界その2。自己解放のおかげで、これぞ「身体を使った表現」と知った。
m	A++	楽しいの一言。神田先生の七色の声に感動。
n	A	初めての経験でしたが、声とリズムが大切だということは、ダンスにもつながるようにも。「腹に力を入れる」というフレーズも浮かびました。

○ 8月10日1限 武藤 創作・書き換え

c	A	創作が好きで、授業でやったことをどう生かすか考える機会をいただき、とてもよかったです。
d		想像力の限界
f	C	前日のバイトで用意できなかったのが悔やまれる。
h		みんなの想像力の豊かさに刺激されて、たいへん貴重な体験をもらった。
k		宿題にしてもいいかな。
l	A	感じたままに文字におこし表現するという、長らくしてこなかった分野だった。皆さんの個性に触発された部分が大きかった。
m	A+	今回はバラバラだったが、グループで作る楽しさも味わいたかった。
n		苦しかった。が、嫌ではなかった。いつもとは違う頭を使ったこと、客観的に考える態度を必要としたことは、怠惰な自分への警鐘となりました。

○ 8月10日2限 武藤 創作・書き換え

c	A	
f	B	笑える。つまり表現ができているのだ。
h		体験をもらった。
i		参加者それぞれの作品を見る面白さ
k		楽しい。
l	A	(1限に同じ)
m	A+	発表の場のもり上がり…若者とのふれ合いが楽しかった。
n	A	若い人の作品、それに対する講評を聞き、文学の方向性に変化を感じました。短時間で完成度の高いものを作成されたことに敬服です。

○ 8月11日1限 黒沢 ダンス

b		自分のやりたいようにやるのがやっとできました。
c	A	
f	B+	時間の流れが速い。私は踊れる。
g	◎	
h		前回よりもさらに発展した表現が分かった気がする。
j		非常に面白かったです。
k		初回ともっと違った。
l	A	前回の流れを再びあじわうことができた。先生の独特の雰囲気魅せられた。
m	A	身体が、筋肉が、痛さと気持ち良さを味わった。

○ 8月11日2限 武藤 発表会

a		長かった…
b		自分のやりたいことをやり切り、評価されたということが大きかった。
c	A	すばらしかったです。自分で作品を発表するのだけではなく、他の人の作品も参考にすることができ、とてもよかったです。
e	A+	他の方の考え、自分の読み方のクセが分かりました。
f	A+	一日おいたカレーは旨い。皆よく煮えていた。
h		発表も全て十人十色で可能性は無限だなと思いたくなった。
j		文学を自分の中にとりこんで独自のものとして表現できる力を皆さんが持たれていることにおどろきました。
k		楽しい
l	A+	前回の何倍もステキな発表でした。とても楽しかった。
m	A+	楽しみました。

以上

授業内配布物①

ふれろワーク

親しみ

頭で考えている以上、毎優しい思いがふれることによって自分の中から出てくるものがあると感じた。また目をとじてふれあっていると相手の存在がしっかり感じられることも発見した。やはりロレンスのふれあうことがすべての関係をより良くするよさという考えは正しいことを体験した。

ふれろワーク

思いやり

人の心を動かすには、相手の心とつながることが重要だと感じた。ふれろワークを通じて、相手の心とつながることができ、思いやりを感じることができた。また、自分の心とつながることができ、思いやりを感じることができた。また、自分の心とつながることができ、思いやりを感じることができた。

ふれろワーク

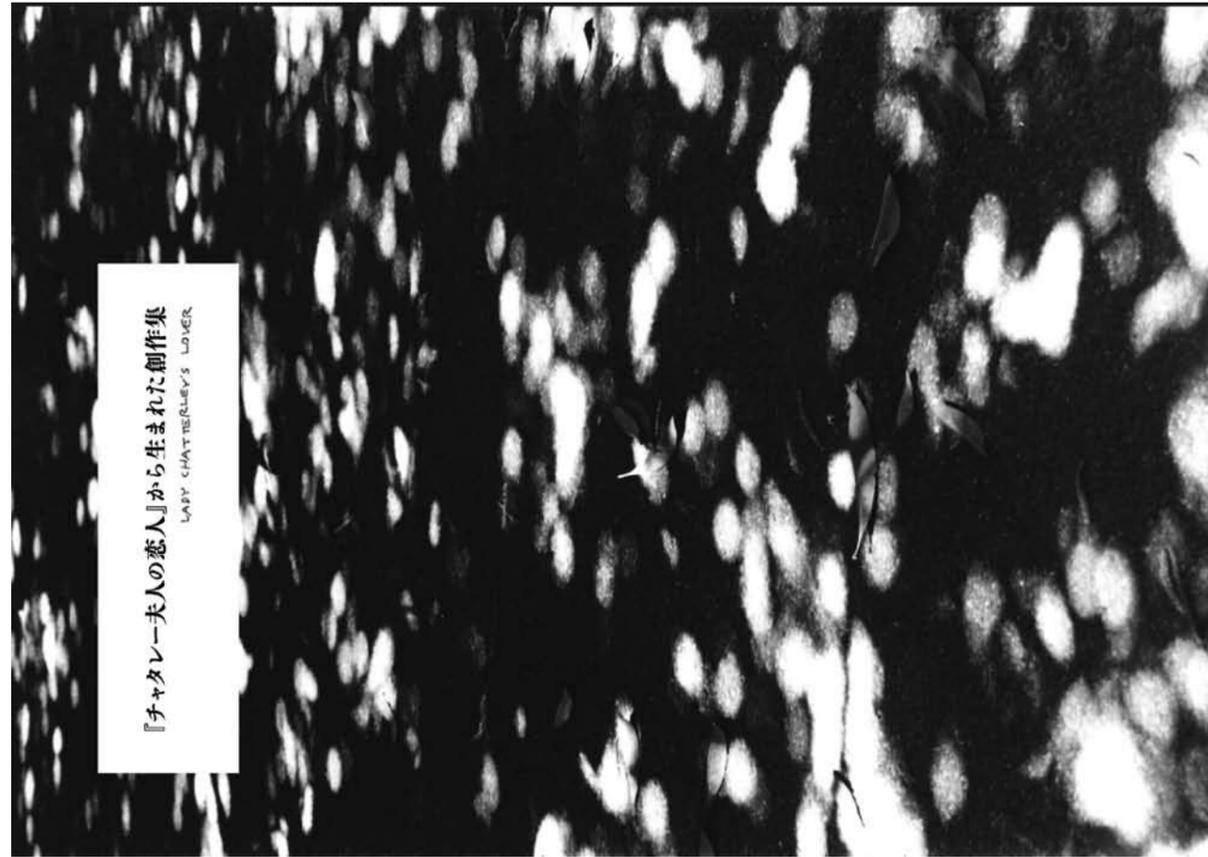
流れ

距離・傾きの違いは大きい。自分と他人の距離は、大きな違いがある。自分と他人の距離は、大きな違いがある。自分と他人の距離は、大きな違いがある。

「流れ」：今回の流れは、色んな人から感じている。自分と他人の距離は、大きな違いがある。自分と他人の距離は、大きな違いがある。

他人に触れると、自分とは違う自分が入り込んできると感じる。自分と他人の距離は、大きな違いがある。自分と他人の距離は、大きな違いがある。

創作文集



序・体感する文学

文武藤浩史

今年二〇〇七年八月六日から十一日までの六日間、慶應義塾未来先端基金の援助を受けて、文学の実験授業が実現した。

趣旨は、身体知！《文学》は、通常学期の授業では履修者が多数に及ぶことから、教師は一方通行の講義で作品解釈を伝えることを余儀なくされる。

もちろん、弱者の視点に立った《現代思想》のあらゆるツールを駆使して作品を解釈するのは大切な営みだ。しかし、芸術の原点は感動すること、心で感じ、体で感じることはないか。そこで『チャタレー夫人の恋人』という文学的価値が高くかつ文体的にもテーマ的にも身体感覚に敏感な小説をテキストに用いて、通常授業で行われる作品解釈を補足する手立てとして、身体を用いた様々なアクティビティを取り入れた文学の授業をやってみた。すでに学生たちには伝えた通り、それは科学的脳科学・認知科学)に見ても、歴史的(一九五〇年代イギリス)に見ても、意義のある試みであることが証明可能だ。

と同時に、現代のような不信と不安の時代には、身体知がカルト的な世界観に繋がる危険性が大いにある。ヨガ的な修行で信者を集めたオウム真理教がその一例。注意しなければいけな

い。そのこともすでに伝えた。

そして、臨床心理学の佐藤仁美、ダンスの黒沢美香、講談の神田陽子、朗読の岡根子と田村探、ヴォイストレーニングの濱野久美と、第一線で活躍する多彩な講師陣の協力を得て、朗読、身体ワークショップ、講義、創作・書き換えなどのアクティビティを行い、作品解釈と繋げることを試みた。

実験授業は盛り上がった。身体ワークショップで体を解放させ、朗読の授業で文学言語への感性を磨いたあとで行った創作・書き換えの授業は、最初から学生主導で熱を帯びて、教師の必要がないくらいだった。その成果を冊子体の文集にして残したいという声も学生から上がり、すぐに参加者全員の賛同を得た。実際に本を作る作業をしてくれたのは、すでに装丁家として活躍する原田潤。

ここに集められた文章を読むと、授業の時の思い出が蘇ってくる。自作を読み、演じ、聴き手の腹をよじらせ、あるいはしんみりさせた学生たちの声や表情がはつきりと思い出される。この文集がその貴重な経験を思い出すよすがとなつて、いろいろな時に皆のこれからの人生の後押しをしてくれますように。

森と女

文原田潤

高台に建つ一軒の屋敷に、女は暮らしていた。戦争から半身不随となつて帰つてきた主の妻であつた。主は新婚早々に性の機能を失つた身体を車椅子に乗せ、精神と頭脳の上に築かれた知的生活を信じた。肉体は言葉に変換され、夫と妻はとても親密で、そしてまつたく触れあいがなかつた。

主は執筆に没頭し、若き知識人たちが屋敷を訪れば、長い長い議論がいつまでも交わされた。人々のあいだで言葉は交わされたが、それぞれの世界はそれぞれのまま閉じられて完結した。入つてきた男は出てゆくときも同じであつた。言葉は亡霊のように本当は存在しなかつた。実体がなかつた。すべては虚無であつた。時間が時計のように過ぎていった。

かつて美しいマスのような女の身体は、肉を落とし、骨張つていった。淡い光を帯びて、やわらかな丸みを描いていた四肢は、本当の豊穡を見る前に、いまや熟さない蕨柿となつて、鏡に映つた。いつも狂おしい不安に苛まれ、手足が知らずにはひくついて、たるみながら痩せていき、しほみ、垂れ下がり、ざらつき、皺をためながら老いていくのが見てとれた。女の肉体を不正への憤りが貫いた。

そんな女を、凍えた屋敷の大庭園に続く森だけが、受け入れた。鳥たちのさえずり、しなやかな木々の力強い幹、湿つた霧りのひややかさ、ワラビの茂みにうつぶせて顔を埋めたときの苦みのあるさわやかな匂い、膝にあたる陽光の炸裂、冷たく透き通つた湧き水の抱く泡。森は女の虚無を薄める聖域であつた。女は次第に森へと足繁く通うようになっていった。

そんなある日、女は森の小径で、不思議な音を耳にする。
ピロン、ポロン、シャラン。
《なんたらう、狸番が勢でも弾いているのかしら》
かすかな音に導かれるように木々を分け入り、女が辿り着いたのは、鬱蒼と生い茂る緑のなかにぼつかりとひらけた、大きな泉だつた。

女は岩陰にしたたる雫の音を聞きながら、眼に映るその水があまりにやわらかで気持ち良さそうなので、裸足を差し入れ、そして服を脱ぎ捨てると水のなかへと裸身を忍び込ませた。

すると、揺れ動く水のなめらかな感触に全身を包まれて、女は眼を開けていることができなくなつた。森の水はささめき、隆起し、強く弱く波となつて押し寄せた。女は水に、泉に、森に愛撫され、侵入され、女を形づくつていた膜が透き通るようになつて、溶けた。

そして、海のようななつた。男たちとのあいだで形にならなかつた交歓が、水のなかへゆつくりと吸い込まれていった。女は自分を取り囲んだ霞のような雫に笑いかけさせた。

森から帰つてきた女は、明らかにふつくと肉を取り戻しはじめた。森に毎日通いながら、腿の稜線が充塞し、肌が艶を帯び、熟した林檎のように豊かになつてゆく女の姿に、主をはじめとした屋敷の者たちは、狸番の男を怪しみ、その疑いを無視しようとするやうに、期待に笑みを浮かべたりした。

女の眼はいまや夜の海のように暗くおだやかに澄んでいた。

ある日、いつものように、女は森へと出掛けた。そして、女は森から帰つてこなかつた。

森の狸番は今日も薪を割っている。

慶應義塾大学教養研究センター

身体知と新しい文学教育

慶應義塾未来先導基金による 2007 年度文学実験授業の成果と可能性

2009 年 3 月 30 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 横山千晶

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-563-1111 (代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2009 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。